

## 二

午後十一時發の青森行は案外に空いてゐた。併し、心身が疲れ切つてゐる私は夕刊を読むと直ぐに眠る工夫をした。何時もは眠れないのが、この夜は流石にはやく寢付くことが出来て、翌朝の六時頃まで兎に角横になつてゐられたのは幸福であつた。それから顔を洗ひ、着物を着代へ、今日の講演の要目に一通目を通すと福島驛に着いた。プラットフォームには渡邊君郡司君等北辰會の幹事だちが出迎に出てゐられた。それから渡邊君と人車で宿舍——藤金本店に向つた。途中北辰會長たる羽田福島縣師範校長に遭遇した。宿につくと會長と初對面の挨拶を交し、渡邊君とは事務の打合をしてから朝食を認め、暫らく休憩した後會長と連れ立つて會場——師範學校に向つた。

午前九時會長の開會の辭に次いで私の講演——「思想問題と教育」の講演があつた。山形縣で教員をしてゐる際視察に來た時から十五年目でこの學校の講堂に入る身

にとつては、幾分の感慨なきを得なかつた。午後には亘つて三時間半兎に角無事にすました時にはホット一安心した。其の後翌日の要目を造つてから、六人（木口・星野・郡司・村岡・佐久間・渡邊）の幹事諸君に案内されて自動車で飯坂温泉に向ふことゝなつた。途中渡邊君が不快を感じて飯坂入口で下車した他は皆無事三時過飯坂温泉柙屋に ついた。途中舊盆の十五日のために着飾つてゐる女たちの姿が少からず目についた。

## 三

飯坂はよいところである。湯がぬるいのもよい。町の地形もよい。愛宕山の形もよい。殊に川——摺上川がよい。川を挟んで見た湯の村の眺めがよい。更に今年は經濟界の不況のため成金風が吹いてゐないのが最もよい。休んだ柙屋の家の構造も面白い。玄關からだんぐりに下つて又幾度も上るなども湯治場氣分を醸生するにはふさはしい。奥の三階に座を占め、湯上りの浴衣姿を川風に吹かせながらぼんやりと愛宕山

の奇妙な山線を眺めた時には、何ともいふにはれないのびやかな気分になった。膳に上つた鮎のフライも甘かつた。併し、慾をいふと鮎の鹽焼が食べたかつた。

心の合つた人達の會合だけに、時の立つに從つて興味はいよ／＼深くなつて、遂に名物の盆踊までも始つた。併し、時間に制限があつたので、名残は盡きなかつたが十時頃に切り上げ、再び自動車を驅つて福島に歸ることとした。この時には曇つた空は既に雨になつてゐた。それでも町の人々は笠を冠つて盆踊を踊つてゐた。床に就くと前後不覺に眠つて仕舞つた。

## 四

二日目は八時半から午後零時半まで四時間話した。午後には會員有志の茶話會に招かれた。役員の要請に從つて私の身の上話——失敗談をした。その歸途物産陳列所と阿武隈川とを見た。陳列所の漆器は何れも私の慾望をそそつた。宿に歸つて翌日の要

目を作り湯を浴びてゐると師範の小澤佐藤の二教諭が訪ねて來られた。小澤氏は私の母校の早稻田の哲學科を卒へ、數年間地方師範に奉職の後廣島高師の専收科に入つて本年卒業された人、佐藤氏は私の郷里の山形師範を経て廣島高師の博物科を出られた人。何れも縁故が深いので、話はそれから／＼と蠶が絲を出すやうに中々盡きない。私は夕食を認める暇さへも惜んで語りつ聞きつした。そこに郡司氏達が來て盆踊の案内をして呉れるとのことであつたので、急いで冷えた夕飯を認め、一同連れ立つて宿を出た。

盆踊は二個所見た。何れも大規模のものであつた。併し、それは餘りに現代化されたものであつた。電燈が餘りに明る過ぎた。唄ひ手に美しい聲の持主がなかつた。踊が白熱しなかつた。——盆踊の味は野趣横溢なところにあり隨つて大きな町などには不調和なものであるといふことを、私は今更のやうに感ずるのであつた。宿に歸つたのは十一時であつた。からだは綿のやうに疲れてゐながら容易に寝つかれなかつた。

私は蚊帳から出て暫らく欄干に凭れてゐた。十六夜の月は清く中天にかゝつてゐた。涼しい風に送られて来る盆踊の太鼓の音は、何時までもくゞドンドンと鳴つてゐた。私は何となく涙ぐましい心になつて容易に座を立つことが出来なかつた。

三日目も無事に済んだ。講演が済むと引續いて閉會式があつた。三月以來の重荷を卸したので、いはうやうなく心が軽くなつた。晝食のドンブリも今日はとりわけうまかつた。星野君に送られて宿に歸り、着物などを片付けてゐると小澤君と羽田會長とが前後して見えた。小澤君とは飯坂行を約束してゐたからである。やがて宿を辭し、會長と別れ、二氏と同道して北辰會幹事諸君十數氏の催にかゝる送別會に臨んだ。極めて平民的なこの會合は心も形も平民にかへつたこの時の私には、洵に快適な催しであつた。御馳走のそばもうまかつた。只困つたことには屬にへたな字を書かされたことであつた。

この會合が豫定より餘計に時間がかゝつたので、文字ずりを案内して下さるといふ厚意に背いて小澤君と二人飯坂に向ふことにした。途中一同紀念の撮影をし、折から來合せた乗合自動車に乗つてこの懐しい人々と親しみの深い町とに別れた。

## 五

車が例の柵屋の玄關に着いたのは黄昏時であつた。席が定ると直ぐ二人で湯に入つた。小澤氏ははじめてとのことに、私が知つたかぶりの説明などをしながら、ゆつくり湯につかつてゐた。小澤氏はしきりに茲は家族を同伴すべき所だといつてゐた。

二人共端近くお膳を引き寄せて冷たいビールのコップを舉げた。私ははじめて旅の幸福を味はふことが出来た。お膳には例の鮎のフライ以外殆ど食べるものがなかつたのさへ聊かも不足にはならなかつた程私の心は幸福に充ちてゐた。やがて十七夜の月が愛宕山からさし上るに及んで興が一入深くなつた。前日と比べて殆ど別世界とも思はれる程静閑なものも幸福の種であつた。私は醉眼を刮いて頼まれた扇面に又復拙い文

字を認めたばかりか、興が餘つて自分の扇にさへ「あたご山の月はよし」と書いた。七月中旬から四十有餘日の間東奔西走席維温らずといふあはただしい生活をした身が、兎に角滞りなく約束の講習を全部済して、今日から自由に讀書も思索も執筆も静養も出来ると思へば、心が自ら躍らざるを得ない。——事實私の心は静かな環境と温厚な小澤氏とに對しては恥しいまでに跳つてもはしやいでもゐた。——併し、それも東の間、私共はもう一度湯に入り仕度を整へ、飽かぬ眺めを見残して車上の人となつた。停車場まで僅か一里弱の行程であるにもかゝはず、私は幾度も睡魔の擒となつた。

汽車は非常に混んでゐて乗ることが出来ない程であつた。福島驛に着くと郡司・渡邊・星野・村岡の諸君が見送のために來てゐられたのは恐縮のいたりであつた。茲で諸君の注意に従ひ、一度下車し奥羽線廻りの上野行に乗り換へたが、これも同様に混んでゐた。やがて汽笛一聲、車は徐々に動いた。五十分……思出の多い自然と懐しい人々を後にして、車は暗の深夜をひた走りに上野を指して走りつづけた。……

## 愛知紀行

—

十月二十三日午後九時四十分發の明石行は幸にして混んでゐなかつた。東京驛に來合せなかつた野口援太郎氏が品川驛から乗られて一行が揃つたので、責任者の下中彌三郎氏は勿論私まで安心して、女教員會議をはじめいろ／＼の教育談が兩氏の間になされた。私は兩氏に反いて『早稻田文學』の十月號に讀み耽つた。須藤鐘一氏の「勝敗」といふ小説が私にかなり強い印象を與へた。

急行でないこの列車はかなりうるさく停車し、其の度毎に乗降者があつた。殊に横濱から乗つた五六人の男の一團（喜劇役者か新俳優らしい）はかなり悪ふざけをす

るので、私の心は何時までも落ちつかなくつた。併し、國府津か何處かでこの一團が下車した後は、時刻もおそくおひく／＼停車の數も減つたので、漸く身も心ものびやかに休めることが出来た。流石に議論好きの下中氏も向側に横になつてゐた。からだか疲れてゐたせゐか幸にして安眠が出来た。

晩秋の明方の空氣は冷たかつた。豊橋を過ぎる頃には三人とも既に目を覺してゐた。いつもはまづい朝食も、温いのと空腹なとでうまく食ふことが出来た。日本晴ともいふべき好天氣は私の心身を爽快にした。野口氏と下中氏との間にはまた議論が交された。私も時々仲間入をした。やがて汽車は豫定の時間に目的地たる名古屋に着いた。驛には本日の講演會主催者たる名古屋新聞主筆の小林橋川氏と井筒節三氏とが出迎へに來てゐられた。

## 二

三藤旅館の一室では主客の間に種々の談話が交された。やがて私は岡崎通信社員で同郷人たる小幡三郎氏の訪問を受けた。用事は岡崎市で一場の講演をせよとのことであつた。私は明夜を約して別れた。間もなく私の讀者の一人の鈴木徳成氏が來られた。おとなしい中にしつかりしたものを包んだ氏の前途の幸福を私は心から祈りつゝ、何彼と語り合つた。氏が色々と骨を折つて下すつたにも係らず、時間の關係上氏の奉職地たる野間行を思切らなければならぬのは残念なことであつた。

氏が歸つた時はもはや正午になつてゐたので、三人晝食を認め、私が第一席をつとめることとして、一人會場たる市會議事堂に向つた。會員は比較的に少かつた。私は「新時代の教育者」といふ題で一時間半ばかりしゃべつて宿に歸り、読みさしの『早稻田文學』を読んだ。吉田絃二郎君の「雉子笛を吹く人」がいろ／＼の意味で私を動かした。私は時々涙に曇つた目を雑誌から離して、遠い北の國の老いたる父母の姿を思ひ浮べたりした。

午後七時から有志の談話會があるので車で會場たる中央食堂に向つた。食後下中氏、野口氏、私の順で各自所感を述べた。私は自分の經歷から現在の經濟生活の實狀を披瀝した後で、労働問題の歸結は労働の創造化にある意味を述べた。其の後で來會者諸氏の批評や感想が語られた。率直に所思を述べるのはよいが、自分のえらい所を人に見せようといふ醜い心事は私にかなり強い不快感を與へた。お互がもつと本當の意味で謙遜になり本當の意味で愛し合はなくては生活の改造がむづかしいといふことを今更のやうに感じた。——創造の愛讀者で優秀な寄稿家たる久野周治氏に面談することが出來たのは大きな喜びであつた。

## 三

野口下中の二氏は十時の列車で歸京されたので、私一人三藤旅館の一室で寂しい秋の一夜を過すこととなつた。湯に入り酒を少々飲んだので、かなり興奮した頭痛も

静まつて翌朝迄一眠りに眠つて仕舞つた。

朝食後宿を辭し、車上で名古屋城近邊を見物し、十時十三分發の列車で岡崎市に向つた。この日も好天氣であつたのは私にとつては大きな幸福であつた。一時間強の短程は忽ち終に近づいた。カバン一つの身輕な私は岡崎驛で下車すると、來合せた電車に乗つて小幡氏の宅に向つた。秋の陽を一ぱいに浴びた沿道の風光は私の身心を鮮活な氣分で溢らした。やがて教へられた商業學校前で下車すると氏の家人が迎に出てゐられた。

私はその人の案内に導かれて琴の字山上の小幡氏宅に達した。氏は私を待ちあぐんで既に市内に出て活動中であつた。私は案内してゐたといふ山上の土屋大將の亭から三河平野を眺望した。秋晴の正午近いこの時は眺望には最もふさはしい時であつた。徳川家康出生の地であり随つて古蹟の多いこの地方は、私の心をして暫く追憶の野に逍遙はしめた。私はふと昨日講演の劈頭に「愛知」は「哲學」の原語たるフィロソフィ

アであり、愛知は嘗て戦國時代創業の偉人を出した所であるといつた自分の言葉を想ひ起して、無限の感慨に打たれた。創業！創造！私の心の奥には何とも知れぬ強い響きが聞える様に思はれた。

琴の字山はよい所であつた。只海と岡崎の市の要部とが見えないのが遺憾であつた。そこらあたりには名も知らぬ秋草が自然の黙示を語るやうに度ましく咲いてゐた。彼方には茸狩らしい三四の人達の姿が見えた。——私の心はまたしても電のやうに遠い故山に向つて驅けるのであつた。

小幡氏夫人のすゝめに従つて晝食を認めてゐると、間もなく小幡氏は『新三河』の高橋悦治氏と一緒に歸つて來られた。流石同郷のおかげで初対面の氏と十年の舊知の如く語り合ふことが出來た。やがて三人連れ立ち、電車で會場に向ふことになつた。瞥見した風光から見て私はこの町には幾分頹廢の氣がたゞよつてゐるかのやうに感じた。

## 四

午後六時半から二時間餘市公會堂で「道德の改造」といふ題で所感を述べた。何等準備がなかつたために演説そのものは不成功に終つたが、聴衆は案外に多く且靜肅に聽いて呉れたはうれしかつた。會が終ると小幡高橋の二氏と連れ立つて旅宿の丸藤に向つた。熱烈な小幡氏、かなり勉強してゐられる高橋氏との間には談話の種が中々に盡きなかつたが、時刻がおそいのでやがて二氏共に歸宅された。私はまた只一人古い町の古い宿屋の一室で寂しい秋の夜を過すこととなつた。

翌朝小幡高橋の二氏及び小瀧市助役の訪問を受け、小幡氏に見送られて停車場に向ひ、午前九時四十分發の列車で歸京の途についた。——秋晴の東海道沿線の山容水色は私に少からぬ幸福を與へた。わけても濱名湖の風光と富嶽の神容とは何時までも私の心の目に映つてゐた。

## 金澤紀行

—

金澤行——それはほんとに急な旅であつた。宣傳講演のために四月三十日午後八時の汽車で金澤に行くやうにといふ通告を教育擁護同盟本部の野口氏から受け取つたのは、其の前日の二十九日夕方であつた。私は同盟宣傳部員であるといふ職責に對する自覺の下に、萬障を差繰つて周章しい旅路に上ることゝなつたのである。

直江津廻りの明石行は案外に混んでゐた。同行の鯉坂君は發車迄姿を見せなかつたが、恐らく他の車に乗つてゐることゝ思つたら、赤羽かどこかで乗込んだので安心したが、私の側には席がないので同君は別な席に着かざるを得なかつた。夜行でもあり

且信越線はさして珍しい線でもなかつたので、私は講演の材料と著述材料になる「文化」に關する切抜を読み始めた。乗客は時を経るに連れて益々殖えるばかりなのに加へて蒸暑いので中々眠れなかつた。一時頃から三時間ばかり眠ると、もう仲春の夜はほのくゝと明け初めてゐた。白皚々たる北越の連山が車窓に隱見し、清爽の氣が胸懷に薄るを覺えた。

直江津で顔を洗ひ、辨當や茶を求め、隣席の金澤の人と越路の話などをしながら朝食を認めた。やがて長い間憧憬の的となつてゐた北の海が指呼の間に現はれた。私は、其の案外に穩かなのと、其の水の色に温みのあるのちに驚かざるを得なかつた。沿道の人家が大抵屋根に石を上げて置くのも奇異に感じられた。眞盛の櫻の色が濃いものにも心が惹かれた。糸魚川では相馬御風氏を思ひ出し、親不知では文明の恩恵に感謝し、市振では山姥の故事などを偲んだ。乗客中には思ひがけなくも私を識る青年が交つてゐた。海が見えなくなると私は隣席の金澤市の人と語り合つた。この人は青島



で仕事をしてゐて用事のために歸省したのであつた。流石に海外で苦勞をしてゐる人だけあつて、其の言葉には耳を傾けさせるものが二三あつた。高岡近所では汽車が思ひ切つて混んだ。高岡の祭のためらしかつた。高岡を過ぎてから漸く足を伸ばすことが出来るやうになつた。間もなく午前十一時半無事目的地の金澤市に着いた。

## 二

プラトホームには講演會主宰「北陸毎日新聞社」主筆の市川清氏、辛酉會幹事の東野長一郎氏はじめ數多の人達が出迎へて呉れた。北國の午前の空は講演にはふさはしくない程クッキリと晴れてゐた。私達は電車で鯉坂君の舊師で金澤高等學校講師のスミス氏の邸を訪れた。そしてそこで私は鯉坂君のお相伴で晝飯の馳走を受けた。私はスミス氏の如才のない、親切な、そして日本語の達者なことには驚嘆せざるを得なかつた。友達の少い數へ年八つとかのお嬢さんの姿が寂しく私の心眼に映じた。時間

がなかつたので、食後直ぐにスミス氏邸を辭し、同氏と三人で電車に乗り會場（縣會議事堂）に向つた。

會場には既に多數の聴衆がつめかけてゐた。私は鯉坂氏の後を承けて「教育の文化的意義を論じて教育擁護に及ぶ」といふ題で二時間に亘つて講演した。聴衆は至つて眞摯で靜肅であつた。新聞の傳ふる所に依れば聴衆六百、教育上の會合としては空前であるとの事であつた。若しそれが眞實であれば私は擁護同盟員として聊か安んじてよい譯である。

閉會後、市川・東野兩氏の案内で旅館「源圓」に疲れを休めた。鯉坂君は急いで夕食を認め七時の汽車で歸京の途についた。私は湯浴をし夕食を認めた後、東野君の案内で犀川河岸「銀水」に開かれた談話會に臨んで一席の感想を述べた。靜かな春の一夜、犀川の水のせらぎとふし知らぬ鄙歌を開きながら、眞面目な此の國の人達と語り合つた光景と感懐とを私は恐らく何時までも忘れることは出來まい。由來、この土

地の人は一體にして大都市に似ず眞面目で親切である。熱はないが温味がある。深みはないがゆとりがある。私は金澤の過去を讚美しないが將來に希望を見出すことが出来る。よい指導者がありさへすれば金澤には必ず美しい文化の華が開くことを信ずる。私はこの信念を以て金澤市民の自覺を要望し、殊に其の先覺者指導者達の奮闘を祈つて止まないものである。——車上こんなことを思ひながら、東野君に送られて宿に歸つたのは十一時であつた。

## 三

私は早朝目を醒した。この日もまた好晴であつた。間もなく東野君が訪れて呉れた。急いで朝食を済して同氏と宿を出た。兼六公園の案内を乞ふためである。

兼六公園はたしかに一見に價する名公園である。併し、私から見れば「兼六」の内容が命名者たる樂翁公のそれとは異つてゐる。公に従へば宏大、幽邃、人力、蒼古、水

泉、眺望の六美點を兼ねるとのことであるが、私から見れば到底宏大を以て許すことは出来ない。兼六公園は畢竟するに庭園的公園である。併し、その代り地の利を以て一長所としたい。見聞の狭い私には大それた断定であるかも知れないが、この公園のやうに市街の中央に位するものは恐らく極めて少いではあるまいか。そして茲にこの公園の一長所があると思ふ。それはさうとして、この公園から見下した金澤市はたしかに市人の誇る如く「森の町」である。そしてこの點では仙臺に似てゐる。あゝ森の町！過去の優れた文化は概ね森の中から生れた。私は金澤市が單なる「森の町」ではなくて新文化の源泉としての「森の町」となることを衷心要望して止まない。單に自然に恵まれた平和な大都市としてではなく、人力の精華を發揮した文化都市としての名譽をかきやかすやうになることを心から希求して止まない。

私は美しい仲春の一朝を、温厚にして而も眞摯な東野君と自然と人生とについて語り合ひながらこの名園を一巡し、更に尾山神社を參詣して電車で停車場に向つた。

停車場には西比利亞出征の衛生隊の一團がゐた。後備衛生部員である私は、これを見て多少の感慨なきを得なかつた。停車場が小さいのも聊か意外であつた。やがて市川主筆も見えられた。講演會や出征兵や滿洲のことなど語り合つてゐる中に改札時刻が來た。軍人の見送人の少いのはさることながら、私には暗い感じを起させた。間もなく汽車が着いた。案外に空いてゐたのは嬉しかつた。午前九時二十一分、汽車は近く再來すべき金澤市を後にして靜に西に向つて動き始めた。その一刹那「萬歲」の叫聲が出征軍人見送の一團から響いた。秒數秒。涙を一ぱいにたゝえた若き老いたる數百の婦人の目が私の目前を通つた。それはほんの一刹那であり、そして勿論全く未知の人の目ではあつたが、私の妻や母が私と別れる時に私に與へたと殆ど同様な深い感動を私に與へる無限の悲哀を湛へた目であつた。

## 新潟紀行

### 一

長い間楽しみにしてゐた新潟行も、うちを出る時には風邪のために左程心を引き立てなかつた。併し、汽車に乗ると、新潟直通の夜行であるにもかゝはらず、案外混んでゐないのが幾分氣持を輕快にした。汽車が動き出すと、私は直ぐ携帶のトロワードの『個體に於ける創造的過程』を読みはじめたが、其の考へ方がしつくりと私の考へ方と一致しないのが嫌らなかつた。最近一ヶ月間に二回も往復した信越線は私の心を専心書物に傾注させる程興味の少いものであつた。暫くすると、私は幾分の疲勞を感じたので書物を置いて夕刊を見た。そして私は前刻電車の中で一瞥した郵便局長の大

詐欺事件に関する記事を精讀して、今更の如く彼等の不徳義と當局の不聰明とに喫驚した。乗客の二三も私同様新聞記事に驚いたと見え、同問題に就いて興奮した談話を交してゐた。と、突然其の中の一人が「詐欺も今度のやうに二百何十萬圓となると痛快ですなア」と、如何にも痛快さうに絶叫した。この聲を聞いて、相手のものは勿論他の二三の乗客もどつと笑聲を擧げた。私は聞いてはならない言葉を聞いたやうに強い不快を感じた。

列車が輕井澤邊を通る頃には乗客の大半が眠に落ちてゐた。私は身心が疲勞してゐるにも係らず、妙に神経が昂ぶつてゐて寢付かれなかつた。碓氷のトンネルを通過する汽車のひびきは、これ迄感じたことのない寂しさを私の心に與へた。夜中十二時に近い頃人をたづねるために熊の平で下車した中年の婦人の後姿も寂しかつた。やがて私も何時とはなしに眠に落ちた。驛夫の呼聲でふと目を醒したのは長野であつた。笑を賣る職業らしい二人の女を連れられた男が席に着くと汽車は又動き出した。と、其の連

中の中私の左側に座つた十七八の若い方が直ぐ小さな信玄袋から卵と餅菓子の包とを出してむしやむしやと食べ始めた。私はまた見てはならないものを見たやうないやな感じがしたので目をつぶつた。約二時間許の後に目を開いた時には三人連の姿は見えなかつた。そして短い初夏の夜は既にほのくくと明け始めてゐた。東天にたなびく雲の色と窓を漏れる清々しい朝風とは今日の好晴を語つてゐた。二三度頭を左右に振つて見ても少しも痛くはなかつた。——私の気分ははじめて鮮活と輕快とを覺えた。

直江津以北は初旅なので、心を窓外の風光に向けたが、さして目をそばたてるに足るものもなかつたので、私は新潟講演の草稿を取り出して目を通してゐた。やがて汽車が來迎寺に着くと車室の入口に一人の青年が立ち現はれて私の姓を呼んだ。それは本誌讀者の一人たる鹽浦潮風君であつた。私は氏と長岡市の講演會のことについていろいろ話し合つてゐる中に汽車が長岡に着いたので、氏は再會を期して下車した。私は茲で辨當と牛乳を求めた。辨當に小鯛の鹽焼がついてゐるのも海國に來たといふ感

じを強くするもの、一つであつた。茲で新しく乗つた二人の若い女の服装の甚だしくはでなのは、豫て聞き知つてゐたことはいへ、私にとつて一つの小さな驚異であつた。やがて目的地は近づいた。ほんの瞬間沼垂から一瞥した信濃川は美しかつた。午前八時十分新潟驛で下車すると、驛には新潟思想問題研究会幹事の永井新潟師範附属主事が出迎へに來てゐられた。簡単に初對面の挨拶を交すと直ぐ講演會場たる師範學校に向つた。初夏の朝は北國らしく晴れてゐた。四百三十間の長橋萬代橋から見た信濃川は、靜かに流れて東の方には小汽船が音もなく走つてゐた。町には大きな鯉職が幾つ朝風に雄々しく尾を動かし、所々に朝市が立つてゐた。聞けばこの日は舊暦端午の節句であつた。學校には山崎美雄君をはじめ、主催者たる新潟思想問題研究会幹事諸君が多數集つてゐられた。

## 二

午前九時から三時間餘の間、私は二百數十名の聴衆に對して「創造本位の生活」といふ題で講演をした。氣にかゝつてゐた喉が大して痛まなかつたのも聴衆が熱心なのも幸福であつた。閉會後研究会幹部―永井、井上、青木、尾崎、山崎、野口、宮永、皆川の諸君に招かれて某亭で晝餐の馳走になつた。諸君の中には思想がかなり左に傾いてゐる人もあつた。眞面目なそして元氣に充ちた會話がそれからそれへと續いた。私は流石に思想問題研究会の幹部だと思つた。會後諸君と別れ、永井氏に案内を乞うて市内を見物した。

節句と高等學校の紀念日と日曜日とが重つたために、市内は到る所賑つてゐた。殊に白山公園は市人及び近在の人々で一ぱいになつてゐた。こゝから信濃川越しに見た彌彦山の遠景は忘れ難き印象を私の胸臆に刻んだ。新潟名物といはれる柳と堀の多いのも張目に價するものであつた。日和山から見た北の海は美しかつた。砂も美しかつた。海は至つて靜かで佐渡が島は指呼の彼方に見えた。佐渡通の汽船が靜かな青海原

を夢の如くに進むともなく進んでゐた。信濃川の入口からはポーといふ汽笛が初夏の眞晝の空に懶く響いた。私は昨夏の四國旅行を想ひ起していはうやうなき哀愁と懐舊の情に心胸を打たれた。濱邊の海水浴場にはいろ／＼な旗が柔い潮風に靜かに翻つてゐた。山上の料亭からは鄙歌と絃歌とが絲遊のやうにもつれて靜な濱邊の單調を破つてゐた。見飽かぬ眺めを見捨て、山を下り、望樓に登つて市全體を俯瞰した。山つゞきと信濃川とがこの町に風光を添える二大動力であるといふ私の信念が益々明かに且強くなつた。やがて又人力車に乗り、堀ばたの柳の下を抜けつくゞりつして東堀前通の「室長」に着いたのは午後五時であつた。それから一時間ばかり思想や教育や新潟市のことなどについて語り合つた後、永井氏は歸られた。私は菖蒲湯に汗を流し、籐椅子に疲を休めながら、暫らくは暮れ行く空を眺めていろ／＼の思に耽つてゐた。——思へばこの日（六月五日）は私の誕生日であつた。

## 三

夕食後二時間許の間私はウィンデルバントの哲學によつて寂寥を慰められてゐると、山崎氏の來訪に接した。氏は講演會について私と交渉の勞を取られた人である。氏との話が漸く緒に就いた時にまた更に一人の來客があつた。それは小學校時代の恩師I先生であつた。人生は神祕である。雲山遙かに隔つた異郷で私ははしなくも先生に遭つたのである。而も先生も私もこの市に着いたばかりであるにも係らず、僅々一時間以内の中に二度——講演後會場を出ると間もなく、白山公園から日和山に行く途中と——途上で相遭つたのである。奇遇といはずして何ぞやである。私共は心からこの奇遇に驚異の目をみはりつゝ何彼と語つた。やがて十時近くI先生が辭されると山崎氏は數本の扇を出して執筆を要められた。私は悪筆を恥ぢながら「人生は只一度也」とか「創造」とかいふやうな文字を認めた。その後三十分許話して氏は歸られ

た。——電車のない北の國の夜の町は寂寞として墓場のやうであつた。私は安らかな氣持で柔い床に疲れたからだを横たへた。

翌日は例の如く早朝に目を醒した。この日も亦好晴であつた。洗面後私は籐椅子に仰臥してウィンドルバントに読み耽り、朝食後も引續いて讀書をした。東京にゐる時にはいつも朝は新聞や郵便などに心を亂されるのに、前後五時間に亘つて一意専心讀書に耽ることが出来たのは、思ひまうけぬ幸福であつた。やがて永井氏をはじめ皆川氏山崎氏等の研究會幹事諸君が見えた。私は十二時の汽車で當市を辭することゝなつてゐたからである。三氏と相談しながら晝食を認め、十一時過ぎ宿を辭し、車で停車場に向つた。萬代橋上の眺めは前日と異つた意味で趣致深いものであつた。停車場には、新潟郵便局長の轉任を見送るためとかで多數の人たちが喟集してゐた。私ははしなくもこの市の代表者の一團を見ることが出来たのである。

間もなく發車の時刻が來た。汽車は靜に既知の人未知の人を残して南に向つた。ほ

んの瞬間私は郵便局長を見送る婦人連の涙に濡れた瞳の幾つかを見た。私の心は暫らくの間官人生活について考へてゐた。そして私は一個の野人であることを幸福に思はずにはゐられなかつた。窓外には新しい風光が顯れてはまた隠れた。田の中の立木の畝は珍奇に感じられた。雪を戴く飯豐の山は私の心を郷里(山形縣)と少年時代とに誘つた。初夏の眞晝の日は暑苦しく停車場の砂利を照らしてゐた。私は蒸されるやうな混み合つた車室の中で長岡講演の草稿に目を通した。間もなく車は長岡市に着いた。

## 四

長岡停車場には長岡女子師範主事の阿部源五郎氏が出迎へて呉れた。長岡市で講演をするやうになつたのは同氏慫慂の結果である。——氏は前日新潟師範に私を訪ねて長岡でも講演するやうにと奨めた結果、即日歸京する豫定を變更して前夜新潟市に滞在したのである。繰り返していふ、人生は神祕である。私は新潟市で舊師に遇つた外

に舊知にも遇つたのである。阿部主事は私の舊知であり同縣人であつたのである。氏も私も東京で學生々活をしてゐた時代に、ふとした縁故から私の間借してゐる二階で一緒に牛肉をつゝき合つたことのある仲であつたのである。かうして私は、一層の愉快と一層の責任感とを以て氏の主催する講演會の演壇に立つたのである。

急速の催であるのと、同地の教育界が保守的であるためか、但しは私の信用がないためか、比較的の一般の聴衆は少かつたが、それでも女子師範生と甲種講習生とが集つたために、會場たる女子師範の講堂は一ぱいであつた。鹽浦潮風氏等は二里の道を走せ參じられた。私は「創造教育」の題下に三時間に亘る講演を試みた。幸に元氣も旺盛であつたので、兎に角無事に結了することが出来た。閉會後阿部主事をはじめ大智女師教諭、佐藤古志郡視學、長谷川阪之上小學校長等十數氏に招かれて某亭で慰勞の晚餐の饗應を受けた。感興深い談話が混々として盡きなかつた。諸君の間にはこれを機會として研究會成立の相談などもあつた。私は心から其の成立を祈つた。文化事

業は只教育者の努力によつてのみ成し遂げられることを確信してゐるからである。

やがて汽車の時間が切迫した。私は名残を惜しみながら諸氏と別れを告げた。多忙の身にも係らず、一同の諸氏は私を停車場まで見送つて下すつた。初夏の夕風は聊かほてつた双頬に快く感じられた。途中で買ひ損ねた名物「越の雪」を求めるために、私は阿部氏に案内されて停車場を去る數町の菓子舗を驅足でたづねたことも忘れ難い思ひ出の一つとなつた。

停車場は混んでゐた。人々は興奮してゐた。汽車が着くまで私は阿部氏と語り合つた。私は永井氏といひ阿部氏といひ、何れもよい主事を有する新潟縣の師範學校を祝福すると共に、諸氏の自重と奮闘とを心から祈らずにはゐられなかつた。やがて汽車が來た。疲れた私のからだを東京に運ぶべき上野行が來た。幸にして汽車は案外に空いてゐた。私はいろ／＼な意味で幸福を感じながら、見送つて下さる窓外の諸氏に對して汽笛の鳴るのを待つてゐた。

——(六月十日夜)——



## 高知紀行

## 一

滋賀丸の一等船室で羽織を脱いだ時には思はずホツと安堵の吐息をついた。是非共前日高知に渡らなければならぬ急ぎの旅行であるにも係らず、強風休航のために惜しい一夜を、汚い、暑い、騒がしい、三ノ宮の旅宿に過したばかりか、不案内な私は前日中切符を求めて置かなかつたために、一二等は賣切となつてゐたのが、幸にも一等席を獲ることが出来たからである。

二日分の客と荷とを積み込むこととして、船の混み様は到底名狀し難い程であつた。乗客や見送人の談話や、物賣の振れ聲や、荷積人足の叫び聲やが混亂して、殆ど耳を

聾せんばかりに喧しかつた。私はそれらを耳にしながら、休憩室で大阪から高知市に轉任するとかいふ夫婦連と暫らく高知縣のことや船旅のことなどを語り合つてゐた。やがて出船のドラが鳴り、續いて汽笛が鳴つた。そして船は靜かに神戸埠頭を離れて、懐しい待遠い高知を指して進航した。——それは大正十年八月八日午後六時三十分のことであつた。

## 二

海は幸にも案外靜かであつた。涼氣は刻一刻加はつて來た。一時間前の暑熱と不安と不快とを忘れて私はデッキの上で飽かず暮れ行く海と陸とを眺めてゐた。私の側には小さな女の子を抱いた若い夫婦連がゐた。やがて私たちは互に會話を交へてゐた。聞けばこの若夫婦は夫君が近く米國へ留學の途に就くために歸省することとであつた。私は若い妻と幼い一人子とを置いて海外に旅立つ若い夫と、夫に別れて故郷に止

る若い妻との胸奥を偲んで涙ぐまずにはゐられなかつた。そして「今の中思ひ切つて出かけないと益々出かけにくくなりますからね」と、静かに語つた若き夫君の言葉は、何時までも執念く私の心耳にからみついてゐた。

やがて日は淡路島に落ちた。涼しさは愈々加つて來た。月の光は次第に明るくなつて來た。私は船室で少憩してから又船舷に出て、半月の光に淡く霞む夢のやうな淡路島を眺めてゐた。そして三等船客である二十歳許の一青年や、一等船客で愛媛の松山から高知に歸省する青年學生等と色々な物語をした。暫らくしてから、休憩室でこの學生と冷いサイダを飲み、再び船舷に出て、益々輝いて來た月を眺めてゐた。私の側にはいつか又若夫婦が立つてゐた。私は子供に海の夜風が有害なことを話したら、若い妻君は快く諾つて直ぐ子供を船室に寝かして來た。若い夫君は暫らく話してから一人寝に就いた。私は月が次第に海に落ちる珍奇な現象に驚異の目をみはりながら高知生れの若い妻君と話しつゞけてゐた。やがて月は三分の間に海に落ちた。若い妻君も

船室に入つた。私は一人で、暗いそして静かな海面を見つめながら、暫らくは東都に寂しく留守居する妻子のことを思ひ起してゐた。……

海は遂に静かな海として夜が明けた。顔を洗つて船舷に出て見たら、懐しい吸江灣が目睫の中に迫つて來た。急いで仕度を整へ、若夫婦の愛兒をあやしなから棧橋に近づくの待つてゐた。やがて船は静かに止つた。棧橋には舊知の高知新聞記者鍵山君や初對面の長岡郡教育會長山崎少將が來てゐられた。待合室には香美郡教育部會長の島内校長や近森長岡郡視學も見えた。やがてこれら諸君の案内によつて電車に乗り御免町に向つた。途中山崎會長と別れ、他の二氏と共に電車を終點で乗り捨て、長岡郡役所に少憩して郡長に面會した。この時郡長からすゝめられた氷水とサイダの冷い味は今尙忘れることが出來ない。そこから又三人で自動車を驅つて最初の講習會場地たる赤岡町に向つた。海近い宿舎に旅装を解いてホツと一息ついたのは、それから約二時間後であつた。

## 三

爾後一週日は實に多忙であつた。到着當日は、午後一時から香美郡一二部會主催の講習會に於て「哲學」の題目の下に四時間の講演を試みた。翌十日は、午前中四時間前日の續講を濟し、晝食を認めると間もなく迎へに見えた安藝郡教育會副會長上杉安藝小學校長と同乗、五里の道を自動車で安藝町に向つた。自動車沿道の海の眺望の佳かつたのは思ひまうけぬ喜びであつた。安藝町に到着後、風涼しい某亭の三階に少憩してから小學校で郡教育會員のために「創造本位の生活」といふ題で二時間に亘る講演を試みた。閉會後、上杉副會長安藝郡視學其の他數氏の青年教育者諸君と冷たいビールを吹きながら教育と人生とを談じ合つた。一時間前後の短い時間ではあつたが、眞摯なそして温い人々との赤裸々な會談は永しへに忘れがたい深い強い印象を私の胸奥に印刻した。盡きぬ名残を惜しみながら、郡視學と自動車に同乗して歸途につ

いた。翌十一日からは、早朝自動車で三里の道を御免町に向ひ、八時から四時間長岡郡教育會のために「創造本位の教育觀」の題下に講演して午餐を認め、直ちに自動車を走らして赤岡町に歸り、一時半から四時間哲學を講じた。これが三日間つゞいたので、流石の私も幾分の疲勞を感じずにはゐられなかつた。憧憬の的であつた海岸をさへも僅に二朝訪うたに過ぎなかつた。十二日の夜は香美郡講習會幹部諸氏に招かれて某亭で慰勞の馳走になつた。思出の深い「よさこい節」を聞いたり「箸ケン」を見たりして楽しい一夜を過した。十三日で香美郡の講習會は無事終了したが、餘りに疲勞したので、其の夜は赤岡町に一泊し、翌朝五日間住み慣れた同地を辭した。私は茲に私の幸福のため全力を傾注された島内會長をはじめ其の他の幹部諸氏、親切と聰明とで私をねぎらつて下さつた接待係の女先生、異常の熟練を以て私を數度東西に運んで呉れた自動車運轉手某君。及びはるく愛媛縣から來聽され且五日間私と同宿された二人の青年教育家諸君に對して、衷心の敬意を表すると共に永久の幸福を祈つて置く。

十四日は講習終了後某氏の案内を受けて五臺山を見物した。山が大きい外には案外に平凡であつた。文珠堂で休憩した時に雑僧が某新聞の不良少年少女に關する記事を熱心に讀んでゐたのに心が動された。「よさこい節」にある「坊さんかんざし」の傳説なども想ひ出されて含笑まじにはゐられなかつた。小舟で灣を横切り、新地から電車に乗り、舊知の城西館の一室に寛いだ時にはいはうやうなき安易の情を感じた。併し、多忙な身は一時間の休憩すら許されなかつた。午後七時から高知新聞社の「文化講座」のために一場の講演をするやうになつてゐたからである。やがて公會堂で「創造本位の文化觀」といふ題で二時間に亘る講演を済して歸宿した時には、身體が綿の如く疲れてゐた。私は冷いビールを二本傾けると前後も知らず寢入つて仕舞つた。

十五日の午後一時には無事に講習會が結了した。それから山崎會長の御宅に案内されて湯の馳走を受け、少將夫人及び二人の愛息と共に電車で新地に向つた。終點には既に蘆田惠之助氏、長岡郡長、御免高等小學校長、近森視學の諸氏が來てゐられた。

實は蘆田氏（前年同郡の講師たり且次の日の教育會總會で講演すべき）と私とのために舟遊を催されるところなのであつた。

やがて一行は一艘の屋形船に乗じて風光明媚な吸江灣を下つた。ボラが澤山ゐるのは一つの驚異であつた。間もなく當地唯一の海水浴場たる種崎で一同船を下り、千松公園で松を賞し、海岸で高浪に驚き、渡舟で海を横ぎつて大町桂月氏の雅號の出所として有名な桂の濱を見物し、海近き茶店の椽臺に憩ひながら赤い氷水で涼を呼び、薄暮種崎に歸つて再び屋形船に乗つた。この時は既に十日許りの月が中空にかゝり、そよ風の吹く吸江灣には銀蛇が靜かに泳いでゐた。そして料理がかりの少將夫人の手で澤山の御馳走が用意されてゐた。私のために特にかつをのたたきや奴どうふを料理して下さつたことは、何ともお禮の申し様がなかつた。やがて二臺のボンボリに蠟燭が古代らしく燈された。船頭はかいを執つた。船は月明の吸江灣を滑るが如く高知市を指して進んだ。風は愈々涼しく海は益々靜かであつた。そして杯やコップや皿や茶碗

がしきりに動いた。あゝこの一夕の光景！多感な私には恐らく永久に忘れ得ないであらう。飽かぬ情趣を惜しみつゝ、會長御一族を後に船を辭したのは十時近くであつた。私は蘆田氏と共に高知市に歸り、宿に着くと直ちに蘆田氏を誘つて某亭に到り晩くまで氏と杯を交して歡談した。

翌十六日は蘆田氏と共に長岡郡教育會總會に臨み、「思想問題と教育者」といふ題下で一時間餘の講演を試みた後、親切にして熱心誠實な會長や、おぢさんのやうな懐しい感じのされる郡長や、私と同年で酒の強い郡視學や、その他の方々に多日の好意を謝すると共にその幸福を祈りながら、一人御免町を辭去して電車で高知市の宿舍に歸つた。そして午後一時の自動車で第三會場地たる高岡郡に向つた。

## 四

自動車は飛ぶが如くに西へ〜と快く驅けた。そして間もなく須崎に着いた。不

幸！須崎から久禮へは船も自動車も行かないとのことであつた。私は暫し途方に暮れたが、休息した<sup>車</sup>旅宿の向ひが高岡郡役所であることを知つたので、迷惑をかけるとは知りながら同所を訪ひ、事情を話して自動車の周旋を頼んだ。幸にして親切な學務課の某氏の一方ならぬ助力によつて一臺を傭ひ切ることが出来たので、私同様に困つてゐる三人の人々と同乗して久禮町に向つた。私は自動車の運轉手の妙技に益々敬服せずにはゐられなかつた。九十九折の坂道を何等の不安もなく馳けて行くのは痛快の極みであつた。坂を馳け上る自動車の中から見た須崎港はたしかに絶景であつた。やがて久禮町で自動車を乗り換へた。ところが乗り換へた自動車中に、私と一緒に八日間過した愛媛の一青年教育家が乗つてゐたのは限りなき欣びであつた。自動車は勢よく發車した。例によつての坂道である。海拔千餘尺、驅けること約二時間、峠の茶屋を境に車は下り始めると間もなく目的地たる仁井田村に着し、そこで愛媛の先生と別れて宿に着いた。晝食後直ちに自動車に乗つたために胃が重く氣分が悪かつたが、涼し

い山風を心行くばかり全身に受けてゐると次第に気分が恢復して來た。やがて主催者たる宮地定晴君本誌友たる田井清君などの訪問に接して全く元氣に復した。この夜は久方振で安易な靜平な眠りに落ちた。

十七十八の兩日に亘つて「創造本位の教育觀」の題で五時間づゝ講演した。不幸にして兩日とも雨天であつたために、樂しみの一つとして來た高原氣分を十分に味はふことが出来なかつた。それよりも困つたのは腸を痛めたことであつた。否それよりも困つたのは十八日に講習が終了したが高知に行く自動車に満員で乗れないといふことであつた。併しこれは會員諸君の非常な盡力によつて遂に一席を獲ることが出来た。自動車に乗つて別れを告げた時には私の目にはあついで涙が一ぱいになつてゐた。恐らく一生涯この土地に來るやうなことはないかも知れないと思つたからである。自動車は、多感な遊子の衷情を知る由もなくひた走りに高知市に向つて走つた。但し、郵便自動車であるために伊野を迂廻して高知市に着したのは午後十時であつた。何處とも

知らぬ土地を暗夜自動車で驅ける心地は決して愉快なものではなかつた。城西館の一室に身を横たへた時には口を利くことさへも懶い程心身が疲勞し切つてゐた。やがて湯を浴び食事を認めて床についたが下痢は容易に止らなかつた。

翌日は船が出るといふ吉報に元氣づいて起床し、疲れたからだもかまはずに支度をして正午の近づくのを待つてゐたら、十一時半頃番頭が休航を知らせた。私はいはうやうなき失望と焦燥とを感じたが如何ともすることが出来ないので翌日まで靜養して自動車で歸途に就くことに決心したところに、山崎長岡郡教育會長・島内校長が相踵いで見送りに來られた。私は衷心其の厚意を感謝すると共に諸氏の幸福を祈つて別れを告げた。親切な老婢の心盡しの甲斐もなく下痢は容易に止らなかつた。私は晝食をも取らずに綿のやうに疲れた身體を蒲團の上に横たへ、はるかに歸京をまちあぐんでゐる家族の心中を推測しながら、新聞を読む他には爲すべき術がなかつた。斯くして、一日一夜靜養した甲斐があつて、翌朝は幾分元氣を恢復したので、粥を認めて二週間

住み慣れた高知縣を去るために自動車上の人となつた。その時雨がしきりに降つてゐたのも私の氣分にはふさはしかつた。自動車が方々から客を集めて愈々二十三里の長途を突破しようとする時には満員——六人であつた。

自動車が餘りに遅いことは私に少からぬ不安を興へた。この途中には大危氣オホキ小危氣といふ危険な場所のあることを知つてゐたからである。乗客同志は間もなく皆打解けて何かれと語り合つた。雨は降つては止み降つては止んだ。途中某所で車を止めて乗客一同晝食を認めたが、私一人は食へることが出来なかつた。乗客はこの休憩の間に一層の親しみを加へた。自動車が出發した後は盛んに串戯をいひ合つた。この頃から吉野川の風景は益々其の美を加へ、大危氣に到つて絶景を以て稱する程の美觀を呈した。無事にこの難所を通過したと思つて一安心する暇もなく、がけくづれの爲に車が前むことが出来ないといふので不平ダラ／＼下車し、荷物を人夫に擔はせ細道傳へに吉野河畔に下り、小舟で河を渡つた。そこで荷の賃錢のことで一同が人夫たちと談判

したことも今は楽しい旅の思ひ出の一つとなつた。暫らく休憩してゐると、池田から自動車が來たのでそれに乗り移つた。そこから池田町までは僅に五里の道程であるから、自動車は間もなく町外れの吉野川の渡し場に着いた。が不幸、其處には向ふ河岸から渡つて來た荷馬車が砂利道のために動くことが出来ないで立往生してゐた。で、止むなく私共も手傳つて馬車の後押しをしたが、馬はベタリと地上にしやがんで仕舞つたので、止むなく馬を車から外し、車だけを片付けて自動車が舟に乗れるやうにした。渡しを越すと間もなく池田の町に入り、やがて池田停車場前に達した。二週間振で汽車の停車場を見た私は、恰も舊友に遇つたやうな懐しさと嬉しさとを感じた。

同勢六人中五人は驛前の旅館に休憩した。私は早速粥を注文して心なき婢どもの嘲笑を買ひ、止むなくうどんに注文をし代へたらかけを五つ持つて來た。私は漸く其中一つだけ食べて其の他を同勢に食べて貰つた。うどんは思ひ切つてまづかつたが、併し、そのために元氣が恢復して來たのはまうけものであつた。やがて私は東京驛ま

での切符を求めた。切符の「東京」といふ文字を見た時には思はず接吻したい程の強い愛の衝動を感じた。私は他の五人の友人たちと別れて、汽車に乗り込んだ。そこには二人の客がゐた。そして何れも高知から自動車で来た人達なので、一見舊知の如く倏ち胸襟を開いて高知のことや四國のことなどを語り合つた。殊に其の二人は人には聞かせられないやうな「男だけの話」も平氣でそして面白さうに語り合つてゐた。そしてその話は汽車が餘程進んでも尙盡きなかつた。私は二人の會話に背いて、汽車道と即きつ離れつして流れてゐる吉野川の景色に強い親しみを感<sup>じ</sup>つ、眺めてゐた。間もなく日が暮れたが、その頃から乗客が次第に殖えて遂に満員以上となつた。やがて汽車は淨瑠璃の「鳴門」で懐しい徳島を過ぎて小松島に着いた。この時十五夜の月は美しく照り榮えてゐた。

汽船は非常な混みやうであつた。私は幸に汽車で連になつた人のおかげで靜かな場所<sup>に</sup>に席を取ることが出来た。その人は名物だといつて鳴門わかめを求めることを勧め

て呉れたので二本だけ求めた。やがて午後九時、船は四國を後になつかしい本土——兵庫を指して動きはじめた。私は蒸し暑さに堪へ兼ねて甲板に出たら、此處はまた寒い程涼しくそして美しい月が中天に牙を亘つてゐた。願望すれば二週日滞在した思出の多い四國島は夢のやうに霞んでゐて、只沿岸の燈火のみが寂しく虚しやかに瞬いてゐた。私は「おゝ四國！」と呼びかけた程強い愛着を感じた。實にも懐しい四國の人と自然よ！希くば永しへに平和なれ、幸福なれ。

船室に歸つて一睡したかと思ふと、短い夏の夜は最早曉明に近かつた。私共は仕度を整へて船側に出て見ると、神戸港は既に目睫の間に近づき、停船の燈火が星の如く明滅してゐた。やがて間もなく船が兵庫港に着くと私達二人は第一着に下船し、互に別れをつけて車に乗り、私は睡つた町々を神戸驛にむかつた。神戸驛に着いたのは午前三時半。それから發車までに約一時間あつたが、心身が疲勞して何もする元氣がないので、読み残りの新聞を読みながら夜の明けるのを待つてゐた。間もなく夜も明け



初めた。そして一番の京都行が發車した。丁度其の時、高知からの自動車と一緒になつた五十近い身なりの粗末な老爺と再會した。聞けば娘を尋ねて下の關まで行く人とか。私はいはうやうなき哀愁を感じたので、丁寧の下の關に行くすべを教へて別れた。やがて待ちに待つてゐた四時三十分發東京行が着いたので驅けるやうにして乗り込んだ。發車後は何等記すに足ることがなかつた。名古屋で特急に乗りかへた時に、私ははじめて本當の安心と本當の欣びとを感ずることが出來た。(九月三日、宮埜縣築館町にて)

## 秋田紀行

—

驛夫の呼び聲に目を醒した時には汽車が既に横手に達してゐた。私の心は何となく不満を感じてゐた。秋田縣否楯岡以北への旅行ははじめてのことであるから、目を覺して十分明白な第一印象を受けようと豫め考へもし望んでもゐたのが、前夜郷里山形縣の講習會の慰勞會や友人知己とのつきあひやらで案外に酒を飲んだため、午前一時二十分に赤湯驛で乗車すると間もなく深い眠りに落ちたまゝ今に及んだからである。私は洗面後あつい茶をすゝつたら漸く爽かな氣分になつたが、深酒の疲勞はまだ十分に恢復しなかつた。

發車後着物を着かへ小雨交りの朝風に吹かれながら、私は『現代』を拾ひ読みしつつ、目的地たる秋田市に近づくのを待つてゐた。沿道筋の光景ははじめての旅行であるにも係らず、少しも感興をそゝるものがなかつたのは必ずしも疲勞のためばかりではなからしかつた。何かの拍子で私はフト私と筋かひに乗つてゐる人を見たら、トランクのB Mの文字が示すやうにその人は三木武吉氏であつた。やがて汽車が秋田市の二つ手前の和田驛に着くと、私の姓を呼んで入つて來た一人の紳士があつた。それは私が招聘を受けた河邊郡教育會長の橋本庄左衛門氏であつた。白哲長身哲人ベルグソンの面影を宿した橋本氏の私に與へた第一印象は懐しい快いものであつた。氏と私との間には間もなくこの度河邊郡教育會に關して起つた忌むべき紛擾についての幾分興奮した會話が交されてゐた。併しそれも束の間、汽車は目的地たる秋田市に到着した。驛には手紙の上の知人であり、そして私の招聘の發起人たる小田島留吉君その他二三の青年諸君がゐられた。幾分強くなつて來た晩夏の朝雨は、多感な遊子にかすかな寂寥

を感じさせた。私は直ちに人車を驅つて會場地たる秋田市外の牛島町に向つた。

## 二

八月二十七日より四日間、毎日午前八時半より五時間づゝ私は「教育哲學」について講演を試みた。講演そのものについては何等特殊の意味もなかつた。併し、講習會其のものには一種別個の趣致があつた。講演の開始に先立つて會長をはじめ會員諸君は幾分興奮してゐた。少くとも講師たる私の心はかなりの緊張を覚えてゐた。不當な郡當局の時代錯誤的壓迫と、意氣地なき校長連の葵反とに苦しめられながら、青年教育者諸君の眞摯熱烈な意氣と有志家諸氏の盡力とによつて漸く開始することが出来るやうになつたのが、やがてこの講習會であつたからである。斯くして會の光景は洵に奇異なものであつた。講師の控席には會長以外に郡内の校長が一人もないのは勿論、會場たる學校の校長や首席の姿さへ見ることが出来ないのに、縣や秋田市や其の他の

郡の視學や校長や中等學校の先生たちや市の新聞記者諸氏や郡内の有志家たちなどが卓を圍んで歡談してゐるのに加へて、講習會員の半以上が他郡市の人たちであり、そしてその多くは青年諸君であり、且案外に郡内の女教員諸氏が多かつた。豫め戰闘を豫期して來た私が緊張するのも所以なきことではない。併し、私は四日間自己の最善をいたして講義する他には何等とるべき途がなかつた。そして私の良心はそれで平安を感じてゐた。吁、多忙な四日間！ 朝食以外には食事をすらゆつくりすることも出來ない程多忙な四日間ではあつたが、私は心からの幸福を感じて自己の最善を盡すことに専念した。

第一日は滞りなく講義を済した。小田島君たちは、出席者の豫想外に多いことを笑ひながら私に諷した。私も心ひそかに微笑してゐた。會場を辭して車上二十分の後、秋田市の旅館に着いて風呂を浴び浴衣に着代へて小机の前に座つた時には、思はずホッと譯知らぬ溜息をついた。間もなく、同宿の橋本會長が見え、續いて小田島君

が見えられたので、三人して夕食を共にした。話題は依然として講習會の紛擾に關することであつた。小田島君は私の子供たちに送るやうにと名物の「秋田落漬」を下すつた。私は其の意匠のあかぬけがしてゐることに感心した。話は綿々として盡きなかつた。會長といひ小田島氏と云ひ、外柔内剛の人であるのは嬉しいことであつた。

——兩氏が去られた後、家族に送る書信を認めるといつてもよいか幾分早く床についた。そして靜かな雨の音を聞いてゐたのも束の間、やがて私は靜安な眠りに落ちた。

翌日早朝目を覺すと雨は既に止んでゐた。併し、朝寒はゾツと身に染みて思はず浴衣の襟をかき合せた程であつた。朝食後車で會場に向つた。そして午後二時半には第二日の講義も無事に済んだ。出席者は前日より多いといふことは一入私の奮發心をそそつた。終了後會長小田島兩氏に案内を乞うて秋田市から汽車で船川に向つた。八郎潟の風光を見るためである。沿道に松の多いこと、一體にして男女の風采が美しく且聰明らしいこと、は私の心を動した。八郎潟は豫想程には美しくなかつた。水が淺

いのが物足りなかつた。併し船川港の景色の美しかつたのは思ひまうけぬ幸福であつた。私たちは二時間の時間を利用して船川築港場を訪ひ、所長の案内で築港工事の大體を観覽することが出来たのも、思ひまうけぬ仕合せであつた。殊に「巨人」と稱する大きな器械が大きな重いセメントを運ぶ光景は、「知識は力なり」といふことを今更の如く私に強く感ぜしめた。やがて所長と別れて私共は船川の町を通り、或る店で繪葉書を求めたが未だ發車迄には一時間近くもあつたので、方々休憩所をさがした末、停車場の茶店の往來に出してある椽臺に腰をかけ、かへの罐詰でビールを飲みながら發車の時間を待つてゐた。分厚のガラスコップ、かへのをがにと呼ぶかみさんの言葉なまり、店頭に並べられた水瓜、すもゝ、うりなどの果物、何れも東北にふさはしく野趣横溢してゐるのが少からず私を喜ばした。やがて發車の時間が來たので私達は汽車に乗込んだ。その時は、初秋ともいひたい晩夏の夕暗が刻一刻と濃くなる頃であつた。

汽車の中では一時間半の間小田島君と互に胸襟を打ち開き合つた。自分の心を正直

に打ち開け得る人を見出すことは實に私の幸福の一つである。やがて汽車が秋田市に着いたら、小田島君の友人が二人迎へに出てゐられた。私は諸君より一足先に車で宿に歸つて湯浴みをしてから會長と夕食を共にしようとしたが、橋本氏の厚意に従つてそれを中止し、同宿の河邊郡會議長で講習會の助力者たる進藤氏と、折から來合せた小田島君他二人の青年教育家諸氏と、都合六人で某亭に席をうつした。同亭の二階から見た柳の多い河岸の夜の眺めは流石になまめかしかつた。そこで聞いた「秋田音頭」は私をして數年前の盛岡行を想ひ起さしめた。この節廻しが金山踊の歌曲に似てゐたからである。そして秋田音頭は私には耽か不満なものであつた。その曲節の單調であるのは姑く措き、其の速度のあまりに速い點に於て、其の歌詞に「こ」といふ音を人工的に重ねて使つた點に於て、何れも醇朴な、伸々した東北の人間と自然とに反するからである。併し、これに伴ふ踊りはたしかに東北秋田のものとしてふさはしかつた。尤も急速な歌曲と悠暢な舞踊との調和に秋田音頭の本當の値打があるといへばいへな

いでもないが。……

## 三

第三日も無事に講義を済した。終了後直ちに二十人ばかりの會員諸氏と共に牛島驛から汽車で道川に向つた。私のため道川で慰勞會を開いて呉れる諸君の厚意を受けるためであつた。牛島驛の入口に、雨に困つた人のために貸す傘が村役場(?)の名で並べられてゐたのは私に少からぬ感激を與へた。この日はあつらへたやうな好晴であつたために、海岸への小旅行は私の心を引き立たせた。やがて汽車に乗り、やがて又汽車を下りた。道川は秋田市を去る汽車行程一時間半の海岸の小村である。私たちは海近い一料亭に座を占めた。そこは渺茫たる日本海にのぞみ、右には牡鹿半島呼べば將に答ふべく、左にはや、はるかに山形縣に近い海岸が見える。風はや、冷いが海はまことに静かである。午後四時ばかりの太陽は小波に碎けて數匹の金蛇が遊いでゐる

やうである。珍らしくも鮮明な水平線は目地はるかな彼方に長く／＼横たはつて自然の偉大を誇つてゐるかのやうである。……私たちは思はずも「人間の弱小」について語り合はざるを得なかつた。

やがて宴は開かれた。酒三行、間もなく美しい自然と人間とが純一無雜の状態に調和した。歌ふものあり、談ずるものあり、笑ふものあり、歎ずるものあり、十人十色ではあるが、大方は純真な心を以て席に列つた人たちであるから、客となつた私の幸／＼福は極りない。感興は時と共に加つたが、無情な汽車は私たちを促して停車場に集合させた。間もなく發車。秋田驛で諸君と別れ俥で宿に歸り着いたのは八時半を過ぐる頃であつた。それから例の如く一浴して橋本會長と共に晚餐をはじめたら、橋本氏に電話がかゝつて來た。私と二人で直ぐ某亭に來よとのことであつた。で食事を中止し、浴衣がけの儘で橋本氏の後について某亭に行つたら、一時間前まで汽車を共にした進藤氏や佐々木氏や秋田新聞主幹の熊井氏やその他の諸氏の一座であつた。私はこ

の夜はじめて幾分酒に酔ふことが出来た。

時は力である。瞬く間に最終日が来た。例の如く早朝目を醒すと既に小田島君が来てゐられた。私に公園を案内して呉れるためである。私は急いで仕度をして氏と連れ立つて公園を指した。朝風は快く私の襟をかすめた。やがて間もなく公園に着いた。千秋公園は確に秋田市の誇りである。規模の大きいのがよい。時代がついてゐるのがよい。人工が少いのがよい。只遺憾なのは水が少いことである。私たちは隅なく見物した後、公園下の寫真屋で記念の撮影をして宿に歸つた。

最終日の講義も滞りなく済んだ。引き續いて閉會式が行はれた。私は會長の式辭を聞いてゐる中に自ら胸がふさがつて熱い涙がホロ／＼とやつれた頬に傳はつた。私が挨拶のために壇上に立つたら熱涙が更に新たに流れ且流れた。會長や役員諸君の苦心、會員諸氏の良心的な態度、有志家諸君の同情を思ふ時、私は泣かずにはゐられなかつたのである。數にも足らぬ私のために多くの人々が悪戦苦闘して、幸茲に勝利の

凱歌をうたふことが出来ると思つた時、私は哭かずにはゐられなかつたのである。そして熱涙に咽んだものは一人壇上の私のみではなかつた。吁、親愛なそして尊敬すべき會員諸君よ。乞ふらくば永久に健在なれ、私が尊い涙を流したのは偏に諸君の眞摯な態度と誠實な心事とに感激したためである。

任務は終つた。責任は果した。私は心からの安易と幸福とを感じて紋付と袴とをぬぎすて、トランクに仕舞ひ、ふだん羽織と着流しのまゝで荷物と共に人車に乗つた。車は靜かに秋田停車場を指して走つた。時は大正十年八月三十日の午後、暗雲低迷してさなきだに陰鬱な北國の空を一層陰鬱にした。停車場には既に會長をはじめ多數の人々が来てゐられた。私は心から其の好意を感謝しながら改札の時間の來るのを待つてゐた。

## 西國紀行

## 一

多年望みながら果すことの出来なかつた九州旅行の途につく機會が遂に來た。——佐世保行の切符を以て乗り込んだ七月二十八日午後五時半東京驛發の下關急行は、幸にそれ程混んではゐなかつた。發車後國府津までは、その前日湯ヶ原から家族を連れて戻つたばかりの途のこととしてさしたる興味も起らず、夕刊を讀んだ後は最近寄贈された『死の境に發揮せられたる日本國民性』といふ小さな本を繕いて暫しの間讀み耽つてゐた。夜に入つては、車が改良の二人乗座席のこととしていつも見るやうな乗客の不體裁は目につかなかつたが、凡ての乗客が西向になり、そして單に自分の隣席のもの

としか交渉のないのが、何となしに暖かみと複雑さを缺いたやうに思はれて不快であつた。殊に隣席には横濱で乗り込んだ四十位の男の人と八つ位の男の子と二人座つてゐたので、幾分の窮窟と喧騒とを感ずるのがいやが上に不快を増すのであつた。併し、それも東の間、やがて隣席の親子共いつか眠に落ちたので、私の心も平靜に復し、専心讀書を續けることが出來た。その中私もウイスキー（前日青島歸りの友人から贈られたもの）が廻つたと見えて眠つて仕舞つた。

翌朝目が醒めたのは列車が朝景色の美しい琵琶湖畔を走る頃であつた。京都で辨當を購つた。三ノ宮神戸邊りを通る時には、感銘の深い去年の四國行のことを廻想して姑らく楽しい思出に浸つてゐた。殊に神戸からは乗客もずつと少くなつたので、心持も自ら伸々となり、舞子あたりを通る頃はチビリ／＼とウイスキーを嘗め乍ら、交る／＼目を書物と外の景色とに注ぎ、始めて旅行氣分を味はふことが出來た。只東京新聞が手に入らないのが幾分朝の氣分を傷つけた。やがて岡山を通る頃には前夜から

読みさしの本を読み終へたのでチ・Iホフの『三人姉妹』の獨譯を繙いた。岡山からははじめての旅であるが、窓外に隠見する内海の水の色は私の心に美を感じしめた。殊に尾の道糸崎あたりの眺めは深い感銘を與へた。併し、眞夏の晝汽車はかなりに苦しかつた。やがて柳井津を過ぎる頃には涼しい夕風が窓から吹き込んで来るので、暑さを忘れることが出来た。殊に、この頃から私同様東京から佐世保に向ふ後席の青年と馴染になつたのでいろいろの話を楽し合ふことが出来たために、一層軽い氣分で旅をつゞけることが出来た。やがて小郡邊で夜に入り、八時五十分下關に着いた。聯絡船は隣席の青年が萬事世話をして呉れたので非常に心勞を省くことが出来た。「旅は道連」の古い言葉が新しく私の心に蘇つて來た。

## 二

關門海峽の夜景は豫想程美しくはなかつたが、船足が割合に速いのと夜風の涼しい

のとは思ひまうけぬ喜びであつた。門司に着くと、舊知の西山木屋子君が夜中態々出迎へて荷物を手傳つて下すつたのは感謝に堪へなかつた。待合室で小憩の後同君の見送を受け、例の青年と共に長崎行に乗換へた時は既に夜の十一時になつてゐたので、長途旅行の疲勞が出て、汽車が動く直ぐにクッションに身を横たへて眠に就いたが、早岐で乗換の心配があるので、時々目が醒めるのは心苦しいことであつた。その中短い夏の夜はホノノと明け初めた。曉明の空氣は流石に涼しかつた。やがて午前五時近く早岐で乗換へ、間もなく目的地の佐世保市に到着した。驛では圓田會長及び池月旅館主人の出迎を受け人車を列ねて旅館に向つた。早朝のことゝて人家は大抵未だ戸を閉ぢたまゝであつたが、藥屋の多いことゝ、行きかふ白い服の海軍々人とが特に目についた。

旅館に着いて旅装を解き、朝食を認めた後直ちに會場に到り市聯合教員會のため「教育上の新思潮批判」の題下に約三時間講演を試み正午歸宿した。爾後六日間――



七月三十日より八月四日まで——午前中は毎日この課程を繼續し、大體豫定通りの講演を結了した。例年にまさる暑さは九州に於て特にきびしかったので、生來汗かきの私はかなりに苦しかった。幸に宿が廣くて静かであつたのに加へて好きな水を自由につかふことが出来たので、講演後は幾分苦しみを減ずることが出来た。

第三日目かの午後私は異様な鳴物の音に驚かされた。それは如何にも長閑なそして一味の哀愁を帯びた鳴物の音であつた。聞けば當日は宿舍近所の某神社の祭禮で、鳴物の音は祭に出る「浮立」といふ郷土踊の踊手が町を練り歩きながら叩く鐘の音とのことであつた。私はその晩宿の三人の女の人達に案内されて件の祭禮を見に行つた。祭は案外に賑はつてゐた。例の「浮立」も踊つてゐたし、又別な手踊もあつた。併し私の特に目を惹いたのは氷店の非常に多いことであつた。

四日目かの午後圓田會長の案内で灣内に淹留してゐる軍艦肥前を參觀したが、初めてのことで深い印象を受けた。私は何よりも先づ軍艦生活の苦痛に想到して、海軍

軍人たちに同情した。これに次いで私の驚いたのは軍艦の内部の甚だしく複雑なことであつた。一通の見物が終つた時に私は何とはなしにホーツと太いためいきをついた。恰度其の時、前鎮守府司令長官の出發に對して禮砲を發射する所であつた。私は子供のやうな心で發砲を待つてゐた。やがて號令一下、火蓋は切られた。砲聲はこだまをかへして天地山水にとゞろいた。私は實戰の際を想像してかなり強い興奮を覺えた。艦を辭してポートでかへる途中見た水兵たちのポートの練習も鮮かな印象を止めた。陸上に出ると暑さは一層の強さを加へたやうに感じられた。

## 三

六日は瞬く間に過ぎて、私は八月四日の午後四時の汽車で暑い佐世保市を辭した。市を去るに當つてこの町に子供の土産に持つて歸る名物のないことが私の心をまた暗くした。早岐で乗り換へ又鳥栖で乗換へると、車中に早大學長の鹽澤博士の一行が乗

つてゐられた。私は一行中の學友の武島君と語り合ひながら暫らく車中の暑さを忘れてゐたが、やがて二日市で學長等と別れて下車し、人車で武藏温泉に向ひ、某旅館に投じた。一風呂浴びた後月の光にクッキリと鮮かな輪廓を描いた天拜山を前にして杯を手にした時には、聊か感傷的な氣分の湧くのを覺えた。

翌五日は例の如く早朝起床、午前六時半宿を立ち、七時十分の軌道に乗つて太宰府に向つた。前夜二日市に一泊したのは太宰府を訪ねるためであつた。やがて下車すると驛側の茶店に荷物を托して太宰府を参拜した。私は何よりも先づ鬱然たる樟の大樹に目を刮つた。太鼓橋も心地よかつた。鯉に與へる麩を賣る少女の質朴なのも場所にふさはしかつた。飛梅はさ程でもなかつたが拜殿は立派であつた。社内では神官たちが朝の勤めをしてゐた。無言のまゝで供物を捧げたり禮拜をしたりしてゐる老神官たちの寂しい顔ばせは、恐らくは永久に忘れることの出来ない強い印象を與へた。境内も廣く且清淨であつた。殊に早朝のことゝて涼氣が全境内に漲つてゐた。私は態々一夜

を泊つて茲に参拜したゞけの甲斐があることを喜んだ。只遺憾なのは、拜殿の直後の背景が貧弱なことゝ、拜殿の前にお神籤箱が備へられてゐることゝ、社前後にある奉納の唐金の馬や鶏の安つばいことゝであつた。水の好きな私は、大きな唐金の鉢から流れ落ちる水で、數度含嗽をしたり顔や手を洗つたりした後で歸途についた。太宰府から二日市まで軌道車の中は思ひ切つて暑苦しかつた。

二日市で本線に乗りかへて門司に向つた。驛々で開札口に下げてある汽車の時間や行先を知らせる木札が私に快い感銘を與へた。博多近邊の松並木は美觀であつた。只時々三等客が間違つて入り込むのが東北旅行の際と同様に氣にかゝつた。あまりの暑さに博多下車の豫定を變じて門司に直行することゝした。列車が博多に着くと一人の洋装の紳士が乗り込んで來た。見ればその人は前日二日市で別れた武島君であつたので、お互重ね／＼の奇遇に驚かざるを得なかつた。但し、同君は小倉で豊州線に乗り換へたので、私は只一人美しい海を眺めながら門司に近づくのを待つてゐた。やがて

門司下車、小憩後聯絡船で下關に渡つたが前夜程も美を感じなかつた。

午後一時下關發の京都市はずつと空いてゐたので、疲れたからだを樂々と伸ばすことが出来た。列車が進む毎に一人空り二人空り、やがて三田尻では私一人になつたので益々安氣になり、はじめて解放された旅の氣分を心行くまで味はうことが出来た。柳井津あたりの海景色は相變らず美しかつた。やがて薄暮目的地の宮島で下車して聯絡船上の人となつた。

待つ間程なく船は動いた。黄昏時の内海は仄明るく、兩岸の灯火は眠れる如く靜かな波に照映し、殊に對岸の嚴島の火は螢火のやうに點々水天彷彿の間にまたゝいてゐた。船足は迅く夕風は涼しかつた。それも束の間、やがて嚴島神社の大鳥居が見えるよと思ふ中に船は棧橋に着いた。やがて私は赤帽の案内で龜福に旅装を解いてホッとした。夕食後、涼しい風に吹かれながら嚴島神社の夜景を見物した。月夜のことゝて美觀たとふるに物なく流石に日本三景の一であると感歎した。

嚴島の一夜も暑かつた。例の如く早朝起床。午前五時嚴島神社を參拜した。この時案内者が既に起きてゐたには驚いた。神社を全部見物したが、やはり大鳥居に比ぶべきものがなかつた。實に鳥居あつての嚴島であるといふべきである。而も朝の眺めは夜景よりもはるかに劣つてゐた。やがて一通の見物を終り、歸宿して朝食を認め、七時二十六分の聯絡船で嚴島を發足し、宮島で本線に乗り換へた。この日も亦車内は非常に空いてゐて私以外には只二人しか乗つてゐなかつたが、その人たちも何時の間にか下車したので、後は私一人となつた。涼しい朝風は車窓からどん／＼と流れ込むのに加へて、煽風器の風も通ふので、日中にもかゝはず暫らく暑氣を忘れることが出来た。

笠岡邊で舊知の一學友と乗り合せたのは偶然であつた。岡山ではどや／＼と大勢乗り込んだのと日盛の頃とでかなりの苦痛を感じてあつたが、やがて姫路についたので下車し、顔を洗つたり新聞を求めたりして一時間許休憩の後、播但線に乗り換へて第

二の講習地たる福崎に向つた。發車後一時間ならずして薄暮目的地に達し、福崎小學校長の出迎を受け、驛前の旅館角屋に投じた。静寂な一小村であつたのは聊か意外であつた。風通しがよく且千頃の青田にのぞんだ廣い二階を明け難して床についたその夜の夢は涼しく安らかであつた。

## 四

八月七日より五日間、毎日午前中、福崎小學校に於て兵庫縣神崎郡教育會のために『創造本位の教育觀』の題目の下に講演を續けた。講演そのものにはさしたるかはりもなかつたが、會員諸君の熱心は私に少からぬ幸福を與へた。會の當局が會員を精選するために態々特別の手段を講じられたことや、或る學校では、校長はじめ職員大部分が開會前長期間に亘り學校に集つて、拙著『創造本位の教育觀』を研究されたことなどは、特に私の感謝に堪へぬところであつた。或る日の午後熱心な會員諸君の訪問

を受けて、風の涼しい宿舍の二階で、夕方まで教育や人生を語り合つたのも今は楽しい思出の種となつた。毎日午後宿舍の二階に音信れる涼しい青嵐、三日の間時々沛然として到つた白雨、學校の冷たい井水、宿のあきみさんの巧妙な安來節、何れも鮮かな印象を私の心に刻み込んだ。

楽しい五日は瞬く間に過ぎて、私は十一日の正午に近い頃福崎を辭し、姫路で乗り換へて京都に向つた。本線は例によつて空いてゐたのに加へて風光明媚の舞子や須磨を通るので、連日の疲勞をも燒蕘の暑さをも忘れ、淨瑠璃などを口ずさみつゝ楽しい旅をつゞけることが出來た。やがて午後五時近く京都驛に下車、荷物を一時預に托し、直ちに電車に乗り、四條小橋で下り、この前見残した八坂神社、圓山公園、智恩院を一覽した。圓山公園は案外殺風景であつた。八坂神社境内の井戸の深くそして水の冷たいのには一驚を喫した。智恩院も大きいといふことの外にはさしたる感興も惹かなかつた。智恩院の石段を下りる頃空がにはかにくもり且頻りに雷鳴が聞えたのに加

へて、日も暮れ初めたので、北山邊遊覧の豫定を變じ、徒歩で四條橋に引きかへし、橋畔のレストーランの川に近い椅子に腰を下した。夕暗が迫るにつれて賀茂川兩岸の電光が益々明るくなり、橋上を行きかふ人々の數も愈々増して來た。私は伸びやかな旅行氣分で、小魚を漁る投網を眺めたり、階下を通るながしの絃の音を聞いたりしながら、冷たい生ビールと割合うまい洋食とに暫らく凡人らしい幸福に浸つてゐた。ふと對岸の南座に大阪の文樂の素淨瑠璃がかゝつてゐるのに氣がついたので、又復豫定を變更し、倉皇と會計を濟して南座の木戸をくゞつた。

席についた時には相生太夫の『日吉』が半以上に進んでゐたところであつた。それがすむと次が私の好きな源太夫の『朝顔日記』であつた。そして私の期待は十分に酬いられた。私はこれだけで京都に下車した甲斐があり、豫定を變更した甲斐があると思つた。私が特に源太夫に感心したのは、單に喉で語るのではなくて自我全體で語る點であつた。次は古靱の『忠四』であつたが出物が悪いためか榮えなかつた。津太夫

の『堀川』を聞いて南座を出、少し町を歩いてから、四條橋に戻り、七條橋迄涼しい電車に乗り、そこから徒歩で京都停車場に行き、荷物を請取り、午前零時七分發の東京行急行に乗り、午前三時半過名古屋で下車したが、途中幾度も「この儘東京に行けるなら」など、我が儘な考へを起しては自分を戒めた。眠い盛りの約二時間を蚊とつかれと戦ひながら構内待合室で過し、一番の上り列車に乗り、大府で武豊線に乗り換へ半田驛で下車、直ぐ俣で某旅館に旅装を解き、暫らく休んでゐると、郡視學の石田利作氏が見えられた。午後からの講演の打合せをし、私は朝食後扇風器にあふられながら暫らく眠についた。十一時近く誌友鈴木登久星君等三氏來訪、約一時間ばかり心おきなく快談してゐると復び石田視學が見えられ、同宿の本郡講習會講師としてお出での眞田幸憲氏と一緒に晝餐を認め、やがて一時過ぎ同町小學校にまゐり、「創造主義の生活及び教育」の題下に二時間許の講演を試みた。講演後石田視學をはじめ同校男女職員の方々が親身も及ばぬやうに何彼とも世話して下さつたことは、私の衷心感謝

するところであつた。

講演後一時間ばかり雑談に過ぎた後で數四の方々のお見送りを受け、岡崎より來半の小幡君と同乗して半田町を辭去し、大府驛で乗換へ、岡崎驛に下車、電車で岡崎市に入り、人車で馴染の丸藤旅館に到り、小幡君の御馳走を受け、二時間ばかり休憩の後氏に見送られて再び岡崎驛に引き返し、午後九時五十八分發の列車で歸京の途についた。

### 第三編

## 向陽臺より

□ 自己の瞳を自己の瞳で見ることが出来ないのは私にとつての一大不幸——哲學的不幸である。「汝自身を知れ」といふことが永しへに人生の最大問題であるのは、要するに自己を知ることの困難を語るものではないか。

□ 自己を知るには他を知らなくてはならない。他を知ることとはやがて自己を知ることである。この意味で都會の人が田舎を見ることが必要であると同様に田舎の人が都會を見る必要がある。廣い世間も見ず、低級な人達から安價な尊敬を受けて満足したり思ひ上りたりしてゐる人を見ると、いはうやうなき憐愍を感じる。

□ 八月中十日間滞在した高知縣幡多郡は、私が土佐を辭去した翌日未曾有の災害に見舞はれた。今年の春遊んで懐しい思出の種となつた伊香保が先頃全焼した。舊師の夫人が數人の愛兒をのこして逝き、知人の愛嬢が蕾のままに萎んでしまつた。小庭の梧桐が風なくして婆娑と散り、冷たい風が襟をかすめる。秋は悲しく寂しい。併し、今年の秋はわけて悲しく寂しい。

□ 殆ど毎日のやうに來る商店の廣告や引札は其の形式に於ても其の内容に於ても大抵俗惡極つたものである。中にひとり高島屋の廣告ばかりは殆ど藝術品と云つてもよい程趣味が高雅なのはうれしいものゝ一つである。

□ 或る日私が京橋に行く時の電車中のことである。私の向側に立派な服裝をした品の

よゝ三十前後の婦人が乗つてゐた。其の側には六つ位な洋装の女の子―其の婦人の子らしい―が乗つてゐたが、ちよつともジツとしてゐないで始終不態な格恰をしなからいたづらをしてゐたので、流石に其の婦人もたまり兼ねて小さいが併し力のある聲で「○○ちゃん！御行儀をよくするんですよ！」といふと、其の女の子は直ぐに左の手の指をば自分の目に當ててベツカツコーをした。私は見てはならないものを見たやうに感じて周章して目を逸らして了つた。

四國からの歸途、私は汽車でボーイに宅に出す電報を頼んだ。私の隣りの人も同時に頼んだ。そして二人共電報料以外のかねをボーイに渡し且丁寧に頼んだ。ボーイは快く（兎に角表面は）承諾してゐたので私は安心して宅に歸つて見ると、電報は未だついてゐなかつた。尤も私の電報は、到着の時間を知らしたのであり、そして前日大體通知して置いたから大した不都合もなかつたが、も一人の人の電報が果してどんな

用事であつたか。その人は會社員らしい人でありそして會社の用事で旅をしてゐるとの話であつたから、或は電報が私と同様届かなかつたら事の缺けたことになりはしなかつたかと思ふと、ひと事ながら心配でならなかつた。それにしても許し難きは汽車のボーイである。勿論恐らく忘れたのであらうが、他の事とはちがひ一分を争ふ電報をかけずにしまふといふことは餘りにひどいことである。

□  
心から信じた人にうらぎられることは悲哀中の悲哀である。随つて人を信じ得る人よりも人の信頼に正しく報ひ得る人は一層幸福である。

□  
今年の簡閱轉呼は私にとつては一大驚異であつた。學科の問題が、たとへば「國際聯盟の價值如何」とか、「我が國運の將來」とか「軍備撤廢の可否」とかいふやうな時代に觸れた活問題であることをはじめ、在郷軍人が進んでドシ／＼自分の意見を聞



陳し、轉呼執行官が友人のやうな温和とを皆さんのやうな親切とを以てこれに對したことは去年までは見られない光景であつた。更に、要務令が根本から改造されて在來の形式主義劃一主義盲從主義がかなり排除されたことは注目に價する現象である。

——私はこれまでにない緊張した氣分で轉呼場の半日を過した。

前後四十日に亙る長旅を終つて歸京したのは九月の末日であつた。そして私は今更のやうに月日の速さに驚いた。今年は四月半までは病氣の仕通しであつたし、四月の後半から八月末までは旅行の仕通しであつたといつてもよい程うちをそとに出歩いてゐた。旅行は凡て講演のためであつたから決して無意義に月日を過したといふことは出来ないが、其のために本を読むことが出来なかつたのはたしかに大きな損失である。とうに公にする豫定で筆を執つた『創造本位の教育觀』の原稿が未だ半分も出来てゐないことを考へるといはうやうなく寂寞を感じる。何とかしてこの秋には落ちつ

いて勉強したいものである。

私は十五六年振で福島市に行つた。十四年振で郷里の或る地方に行つた。私は、私の精神生活の變化に比べて見るとこれら舊知の自然は勿論舊知の個人も社會も餘りに變化の少いのに驚かざるを得なかつた。

この頃私は子供の教育の困難をしみじくと感じてゐる。我が子に自由を與へようとする心と私が自らの善と信じた規範に當てはめようとする心との間に斷えざる矛盾扞格を見出さねばならぬことは、極めて大きな悲しみである。

或る日私の子が自分より大きなよその子と小さな子と三人で遊んでゐた。と、大きな子が電車ゴッコをしようと言ひ出したら小さな子がいやだといつた。すると大きな

子が私の子に小さな子を打てといった。私の子は小さな子を打つた。——この話を聞いたので、私は自分の子に何故そんな悪いことをしたかとたづねると、私の子は大きな子のいふことを聞かなければ遊んで貰へないと思つたから打つたとのことであつた。そこで私は直ぐに私の子を連れて打たれた小さな子のうちに行つて彼自身打たれた小さな子にわびさしたら、其の小さな子も何の譯もなしに「僕もごめんなさいね」と再三頭を下げた。これを見てゐる私の心の目は涙で一ぱいになつた。

□

示威運動といふものが最近流行になつたが私はきらひだ。威嚇に依つて自分の要求を容れさせようと思ふことは卑怯なことであり、威嚇に依つて要求が容れられたことに満足するのも亦卑怯なことであり、更に示威運動には必ず俗悪な野卑な亂雑なものが伴ふからである。示威運動は「愛」とも「戦」ともつかない極めて不徹底な態度方法だからである。

□

他人に對して要求する権利や理由があると思ふものは他人も亦自己の要求を拒む権利も理由もあることを考へなくてはならない。随つて苟くも他人に對して要求を提出する場合には出来るだけの謙遜と出来るだけの同情とを以てしなくてはならない。それでも容れられなければ潔く要求を撤回するか、さうでなければ對手と堂々と戦ふべきである。

□

毎朝朝顔賣が呼聲勇ましく通る。きれいで安價で料理の簡単な冷やつこが毎日晝と夜の食卓に上る。新鮮な瓜や茄子や胡瓜の香の物が殆ど無盡藏に食べられる。廻り燈籠や線香花火に子供らが喜ぶ。朝早くから夜晩くまで障子を開放して心行くばかり大自然と黙語することが出来る。着物に依る階級の差別がかなりに少くなる。——夏はよい。夏はよい。少くとも我々平民には夏はよい時である。

戦が直ちに愛ではないと共に戦と愛とは全く別物ではない。戦は高い意味では直ちに愛であると共に低い意味では愛と全く別である。私が「戦より愛」を説くのは低い意味の戦を高めて高い意味即ち愛の變體又は愛の前提としての戦を戦へといふ意味である。愛を根源としない戦や愛とならない戦のための戦を排せといふのであつて、妥協苟合糊塗不徹底の集合たる似而非愛を懲誦するのでは勿論ない。

破壊を説くものが勇敢であると思ふのは大なる謬見である。眞に勇敢なものは破壊を説くものでなくて實際破壊するものである。そして實際破壊したことがあるものは何人も破壊は案外に困難なものであることを知つてゐる。ノラが夫と子とを捨て、静な而も確な足取で住み慣れた我が家を出る時の悲痛極りなき心情に同感の紅涙を流し得る人にしてはじめてノラがヘルマーに説く自覺説を肯定することが出来る。吁、吾々

の周圍には如何に安價な破壊の説教者や其れの表面的讚美者の多いことよ。而も彼等が自ら新時代の創造者を以て任ずるが如きは餘りに悲惨な滑稽ではないか。

「院展」の最終日に雨をおかして私は觀に行つた。私は繪畫や彫刻から藝術的な印象を受ける前に強いそして悲しい實感の擒となつた。——色の褪せた袴を着けて蒼白い顔をしながらシヨンポリと椅子に腰を掛けてゐる女の看守達の身の上を考へたからである。明日からは（恐らく大部分）扶持に離れる彼等の憐れな運命に思ひ及んだからである。

これに反して、帝展には小春日和の第一日に行くことが出来たので幸にさうした悲しい感じから免れることが出来た。そのかはり、けばくしく着飾つた見物の女の人達を見て、私は看守人に對すると違つた意味で憐愍を感じざるを得なかつた。何等金を取る術も知らず、社會に貢獻する力もなくて、只よき父やよき夫を持つた御蔭や美

貌に生れただけで綺羅を飾つて遊び暮し、殆ど娼婦同様の生活をしてゐる婦人達の無自覺を憐れまずにはゐられなかつた。

□

展覧會などに行く譯もなく悪口を言ふのが私の常であつた。判りもしないくせに公衆の前で「何て拙い繪だらう！」などと大言して得意がることさへも少くなかつた。この頃漸くこのやうなことは恥づくべく悲しむべきことだと考へるやうになつた。

——嚴密な批判を下すことはよい。徹底した評價を試みることはよい。自己の批判眼や評價力を信じ且それに忠ならんとすることはよい。併し、それと共に私達は藝術家たちの苦心に對して同情と敬意とを持たなくてはならない。下らない拙いとけなす前に、其の長所を見出し其の價值ある點を見出さうとする愛情を懷かなくてはならぬ。

□

或る日電車に乗ると、女子高等師範學校の徽章をつけた女學生二人とその附屬小學校の生徒と見える少女とが一つの空席を譲り合つてゐた。互に幾度も辭退した後でとう／＼三人とも座につかなかつた。流石に空席に餓えてゐる乗客もこの光景を見て坐り兼ねてゐたので、暫らく、吊革に下つてゐる客が多い中に一つの空席が誰にも占められないで残るといふ奇現象を呈してゐた。私はこれを見て齒がゆくてたまらなかつた。三人の女學生達が互に譲り合ふのは必ず何等か然るべき理由があつてしてゐることであるからよい。併しそれだけでは足りない。三人が座につかなければ其の空席の前を去つて三人以外の誰かが坐り得るやうにすべきである。彼等は知人に對する徳義だけを知つてゐて赤の他人即ち社會に對する徳義を知らないのがわるい。——私はかう思ひながら、件の三人中私にもその空席にも一番近くに立つてゐた女高師生の肩をつつついて「そんなに空けて置かないであなたがおかけなすつたらいいでせう」と囁いたら、その人は直ぐに一揖して腰をかけた。

文壇の諸家が相諮つて田山花袋徳田秋聲二氏のために誕生五十年祝賀祭を開くさうだが文壇のことだけに意味が深く感じられる。二氏が轉變推移の激しい文壇に於て能く一流の地位を保つて今日に至つたのは、勿論兩氏の藝術的天分の優秀に依ることではあるが、更に氏等が（第一義的に）人格が卓越してゐるためではないか。浮薄な流行や輕佻な毀譽褒貶やに動かされないうで常に自らの信じ好む所に従つて一筋に自己自身の道を進んで來たがためではないか。それだけ二氏がかなり長い過去半生の數奇な文壇生活を回顧すると感慨極りなきものがあるであらう。殊に田山氏の如きは、普通教育さへも完全に修めてゐないばかりか、何等文壇的黨派の力に俟つことなく、眞に自己自身の力で今日の榮譽を贏ち得たのは、確かに推重尊敬に價する。氏の藝術的立脚地はいふまでもなく自然主義であるが、氏の人格乃至全體としての生活は寧ろ眞の意味に於ける理想主義に近い、少くとも浪漫的な自然主義とでも稱すべきである。親の

お蔭や官費で僅ばかりの教育を受け、妥協と糊塗と虚偽とで漸く其の地位を保つたり、阿諛や叩頭や形式的精勤やで選奨の恩典に與つて満足したりそれを理想としたりしてゐながら、田山氏が自然主義者であり徳田氏がリアリストであり、田山氏が『蒲團』の作者であり徳田氏が『徴』の作者であることを以て、直ちに人間としての價値が少いものであるかのやうに思つてゐるものが若し一人でも我が教育者の中にあるならば、それは教育者全體の恥辱である。斯くいへばとて、私は二氏の主義や作品の凡てを没批判的に是認するものではない。要は、主義や作品の背景となり源泉となる二氏の人格思想生活に、囚はれた意味の道德家や教育家などに見られない尊嚴なものがあることを指摘しただけである。

文學者や藝術家の眞に偉大な所は、肩書や黨派や形式やの力に依らないで自己の力其のものを唯一のたのみとして生活しようとする雄々しい精神と態度とである。人生

の真相を如實に見、自己の赤裸々な姿を嚴肅に正視し、更に自己の理想生活を歴々と描き出さうとする要求と努力とである。随つて、文學や藝術を以て娛樂遊戯と思ふものは永遠に其の醜陋味を味はふことが出來ない。——眞に價值ある生活を營むことは何人にも困難であるが、文學者や藝術家として眞に價值ある生活を營むことは難事である。そしてこれは、單に私一個の臆斷ではなくて否み難い事實である。吁、文學や藝術は志しながら其の聖境に達し得ないで、中道に挫折し墮落するもの、如何に多いことよ。

□  
教育者が文學や藝術を愛好するはよい。眞に價值ある教育者は眞に價值ある文學を眞に理會しなくてはならない。否極言すれば、眞の教育者は或る意味の文學者藝術家でなくてはならない。併しながら倒に、文學や藝術を愛好することが眞に價值ある文學者であることの證據と思ふものがあらば其れは大なる誤りである。何故なれば、藝

者や娼妓をはじめ、不良少年少女、無爲の青年男女、學藝未熟の學生の殆ど大半が、或る意味で文學の愛好者だからである。この意味に於て、私は勿論教育者に文學藝術の愛好をすゝめる。只私は其の場合どこまでもよいものをしつかり味へといはずにはゐられない。

□  
一見愚劣でないやうに思はれながら最も愚劣なことの一つは、教育者や其の他の勤め人の無缺勤に對する褒賞である。中年以上の男女殊に複雑な生活を營んでゐるものが二十年も三十年も缺勤や遅刻がないといふことには、大抵動機の上に醜いものを含んでゐるか、道德の内容よりも形式を重んじてゐるか、さうでなければ稀有の僥倖であり、随つて前二者なれば寧ろ非難に價し、後者なれば當人自らが感謝祝賀すべきものだからである。この意味で私はこの種の褒賞の廢止を主張して止まない。

師範學校長會議、聯合教育會議、附屬小學校長會議、女教員會議と教育上の會合がかなりに續いた。これに聯關して私は甚だしく忌むべき現象を見た。夫は在京の個人及び團體が全然營利的動機からこれらの會員を「招待」の名に於て利用することである。私は就中女教員會議に於て最も痛切にこの遺憾を感じた。男子の教育者は、たとひこの種の利用に際會しても主催者の腹を見抜くだけの力があるから、大した弊害もないが、嚴密にいへばそれだから一層悪いのであるが、女教員會議の代議員のやうに大抵單純で正直な人達は、「招待」して呉れる人は凡て本當に親切な本當に女教員や教育のためを考へてゐる人のやうに思ひ誤り、其の結果として、神聖な會場に於て子供だましのやうなメタルを賣り付けられたり、おもちやのやうな雜誌の讀者になつたりして喜んでゐるやうな馬鹿げた結果を生ずる。將來は、よろしく會員乃至會合の主催者が、もつと嚴肅な態度を以てこれらの腹黒き人達に對し、醜い動機からの招待などは斷乎としてはねつけるやうにあつて欲しい。

他人の本當の親切を受けることはよい。けれども他人の偽りの親切を受けることはわるい。二重の不徳を敢てするからである。偽りのものを眞實のものとして受けることは、自己を傷つけることであると共に、偽りのものを眞實のものとして他に提供するものも自己をも傷つけることだからである。

明治神宮祭のあつた十一月初めの東京は、お祭騒で明け暮れた。明治大帝の洪徳神威を追慕敬仰するはよい。併し、衷心大帝を追慕敬仰するならば、大帝の聖旨に背かないことを以て第一の心掛としなくてはならない。敢て問ふ、あのやうに俗惡猥雜なお祭騒ぎは果して大帝の聖旨に背かないかどうか。

出来るだけはやく神宮に參拜したいと思ふ心は必ずしも悪くはない。併し、彼等は參拜して果して何を感じ何を祈るであらうか。神殿に額づきながら只偏に一身一家の

冥福利達のみを祈つたものは果して無かつたかどうか。

□  
都會人少くとも東京人は一見宗教心が深いやうに思はれる。併し、彼等の宗教心は大抵の場合本當の宗教心ではなくて殆ど文字通の迷信である。私の殊に心外に思ふのは、宗教が虚榮心利己心の道具に使はれることが多い點である。——七五三の祝ひ日に風邪をひいてゐる子供に得意氣に着飾らせて町を歩いてゐる親を見て、私は今更のやうにこの感じを深くした。

□  
民衆を尊敬するはよい。民衆の幸福を希ふは尙更よい。併し、民衆を本當に尊敬することは彼等の一切の要求を是認することではない。民衆の幸福を本當に希ふことは彼等の一切の要求を實現することではない。民衆の氣に入るやうな言動ばかりしてゐる人よりも、寧ろ時々民衆の氣に入らない、而も民衆に心からの反省を促すやうな人

の中に一層多く本當の民衆主義者——民衆の友を見出すものである。——吁、如何に本當のデモクライトが少くて似而非民衆主義者——曲學阿民の徒の多いことよ。

□  
眞に意義ある生活を營まうとするものは「人氣」といふことについて深く考へて置かなくてはならない。「人氣」が吾々の生活を向上さすよりも墮落さすことが多いからである。「人氣」を盛んにして呉れたものが、最もはやく「人氣」を衰へさすことが多いからである。更に、「人氣」の有無高下が直ちに本質的價値の多少ではないからである。この意味に於て、「人氣」の盛んなものは、何故に自分がさうであるかを明かにすることが必要であると同時に、一般人も亦、人氣の如何を以て本質の如何を卜するところがなく、何故に或る人の人氣が旺んであつて他の人がさうでないかを明かにする必要がある。



輕薄な世の一褒一貶に喜憂する人に真人はない。知己を千載の下に求める程の高い理想と強い信念とを持つて一筋に自己の是とする所に向つて勇往邁進する人のみ真人である。真人の生活は寂しい。併しながら真人の生活は聖い。真人の生活は苦しい。併しながら真人の生活は大きい。真正銘自己自身の生活だからである。他人から求める生活ではなくて他人に與へる生活だからである。他から評價される生活ではなくて他を評價する生活だからである。僅な人氣に思ひ上つて邪道に踏み入るものの如何に多いことよ。

□  
國勢調査の結果は何處でも人口が減ずるやうである。ところがそれを何等か憂ふべきことのやうに思つてゐるものも決して少くない。これは人口の多いことを誇りとすると同じ心理で、嗤ふべき謬見である。ひとり人口のみならず、凡そ眞に誇りとし恥ぢとすべきは、數量の多寡ではなくて性質の優劣だからである。

□  
東京の或る女學校の一優等卒業生が、何等外的必然的條件なしに自ら好んで藝者にならうとした。これは、必ずしも學校教育の失敗のみといふことは出來まいが、彼女が優等卒業生であるといふことには、彼女を優等生として卒業させた其の女學校の當事者は勿論、一般教育者も亦反省するだけの價值はある。

□  
時勢の力は流石に強大である。——傳統の奴隸であるかのやうに思はれてゐた舊劇の俳優たちにさへ改造——自己改造の風が吹き初めたのは面白い。若い舊俳優たちが所謂「柄にもない」新劇に手を出すことを非難したり彼等の藝が其の意氣に伴はないことを嗤笑したりするものには、人生の本當の意義も青年の本當の心意氣もわからない。柄にあることばかりしてゐるやうな臆病な人には意義ある人生が開けないと共に、やつてのけようとする意氣こそは、藝にも學問にも仕事にも熟達せしめる原動力

だからである。

□  
世の一切をあげて覚めかゝつて來た今日、尙依然として傳統の擒になつてゐるものは佛教徒である。小黨分立黨同伐異、果して何處に大乘教的氣分があるか、果して何處に大慈悲の和風が吹くか。それにしても近頃、東京新聞の續物の小説中坊主を主人公としたものが多いのは偶然としては面白い皮肉である。

□  
又しても歳の暮が近づいた。私はどちらかといへば新年の景情よりも歳末の景情が好きだ。眞剣な嚴肅な悲痛な緊張充實した色調がただよつてゐるからである。あらゆる人間關係が、銳角的徹底的になり赤裸々露條々になつてゐるからである。兎に角全力を盡してやる所までやつて見て、出來ないところは運命に任すなり他人の助力を乞ふなりするといふ、倫理的にして宗教的な氣分が萬人の胸奥にも行爲にもただよつて

あるからである。どれ程苦しくとも數日たてば新年になるといふ一道の光明が到るところにかがやいてゐるからである。——この意味で、切端つまつての忘年會に酌む酒の味こそ本當の人生の味——甘辛い、酔ひながら醒めてゐる人生の味である。

□  
覺めてゐる生活が自覺的生活が人生の眞髓ではないと共に、酔つてゐる生活が没自覺的生活が人生の眞髓でもない。眞の生活は、覺めながら酔つてゐる生活即ち超自覺的生活である。所謂思想家とか學者とか智識階級とかいふ人達の生活は第一種的生活であり、所謂民衆の生活は第二種的生活である。嚴密な意味に於ける宗教家や藝術家や道德家の生活こそは第三種的生活——本當の生活である。

□  
何とかして暮とか正月とかいふことに煩はされまいとするが、實際は何時も煩はされる。社會全體が私と同じ心になるか、私の生活が社會から離れるかしない限り、こ

の要求は永遠に實現される筈はないと知りながら、毎年この要求が起り、そしてそれが實現されないことを悔いてゐる。私の精神の何處かに不徹底な矛盾したところがあるためである。

□  
囚はれまいとするのが實は囚はれてゐるのである。囚はれまいと思はないで囚はれないのでなければ本當ではない。銜氣があつたり穉氣があつたりする中はこの三昧境に入れない。併し私の最もさらひなのは生悟りである。慾望を抑へての平和や清淨である。低級な意味の言行一致である。石橋を叩いて渡つて轉ばないことを自慢にするものである。炬火のやうな洪水のやうな泉のやうな旺盛強烈な慾望を満足させながらさ程大きな失敗も蹉跌もないやうな人でなければ、尊敬するに値しない。否、多少の失敗や蹉跌を意としないで大要求の實現に勇往邁進する所にのみ人間生活の面白味がある。

□  
最近、傭主と被傭人との關係が在來と違つた意味で惡化して來た。其れと共に教育者と被教育者との關係も同様に惡化して來た。各種の學校に於て生徒の教員排斥運動が頻發するのは悲しむべきことである。——私が芝園橋から目黒行の電車に乗つて白金に向ふ途中のことであつた。私の前に立つた某中學の四五年級位の生徒が二人頻りと學校の教師の噂をしてゐた。そして先生は凡て綽名で呼んでゐた。やがて其の中の一人がかなり大きな聲でかういつた。「あんちきしょう、あれで點がからいよ！」私はこれを聞いて意はず太い溜息をついた。

□  
或る雑誌の「當代名流の安心する所」といふ質問に答へた（私も答解を試みた一人である）某理學博士と閨秀作家として相當に世に知られてゐる其の夫人の答解とを見て、私は無限の感慨に打たれた。博士は「少しも安心する所なく常にうか／＼と日

を送つて居ます」と書いてゐるのに對して、夫人は「神の存在を信じ、良人の保護の下に絶対に安心を得て居ります」と記してゐる。「少しも安心する所なき」「良人の保護の下に絶対に安心を得て居る夫人があるといふことが悲痛でなくて何であらう。否、これはひとりこの博士夫人のみのことではなくて、我が國の人妻の殆ど大半の精神状態ではないかと思ふと、私は更に一段の寂寥を感じる。ああ、四六時中煩悶懊惱の擒となり動搖不安の境地を徂徠してゐながら、妻子に心配さすのを可哀さうだと思つてそれを自分の胸奥に秘めてゐる夫や父の苦悶に對する理會も同情もなく、只物質的幸福や表面的平和のために安心して我儘勝手な生活を送つてゐる人妻や人の子が如何に多いことよ。

他人を信ずることはよい。併し他人を信ずることに依つて眞の安心を得ようと思つてはならない。眞の安心は只自己を信ずることによつてのみ得られるからである。他

力本願といふことは決して普通の意味に於ける他人——他の個人に信頼することではないからである。

世の中がせち辛くなり、人間の思想が進むに従つて、結婚難が多くなる。主人の息子や娘が何時までも結婚しないのであるのに、下男や下女がどん／＼手輕に結婚して行くといふ悲喜劇が次第に増加して来る。——四五五年の間、毎日朝早く辨當をかかへて私の前をどこかの工場にでも通ふらしい娘があつた。容貌は中以下で而も足が跛であつたが、何時も着物をキッチンと着て目につかないだけのみじまひをしてゐた。近頃暫らくその娘の姿が見えないと思つてゐたら、私の二三軒近くの或る貸間に初々しい丸鬚姿を現はした。私はこれを見て何とはなしに涙ぐましい心になつた。

自己の是正と考へる所を重んじ且それを端的直載に表白するはよい。併し自己の理

會し得ないものを以て直に價値のないものと断ずるが如きは、自己に忠なる所以でないと共に他に對する道でもない。生半可な學識で人もなげな大言壯語を弄すること程不快な事はない。本當に學問しようとする者は先づ謙抑なれ、抑えよう／＼としても抑え切れぬ程充ち溢れる力の自覺に伴ふ矜持のみ、學問する者にとつて眞に意義ある矜持だからである。

□  
兎角はだらけた俗っぽい生活をしてしまふ歳の暮を、去年は講習會のおかげで自分の専攻する學問の研究と發表とに全力を注ぐことが出来たのは、私の心から感謝するところである。殊に地方の講習會などに行くところとしても妥協的な議論の仕方をし勝ちになるのに、昨年末の講習會では、自分の言ひたいことは殆どむき出しに云ふことが出来たのは幸福中の幸福であつた。

□  
新年に改造すべきことは澤山あるが、高級な雑誌が所謂「面白い讀物」を澤山掲載することに依つて讀書界に遊戯的氣分をたゞよはすことの如きは第一に改造すべきことではないか。

□  
今年になつて嬉しいことの一つは（忘年會もさうであつたが）新年會の催が至つて少いことである。三ヶ日の中酔つばらひが一人も目や耳につかなかつたことである。今は安酒に酔はらつて銅臭い氣焔などを擧げてをるべき時ではない。

□  
年賀狀を認める時に最も強く心を動かしたものは、故人となつたものゝ多いことである。年毎に、賀狀を送るべき新しい知人が多くなると共に多年賀狀を取り交した舊い知己が次第に減つて行くことは喜ばしいと共に悲しいことである。

今年も偶然にも一月一日に賀状を認めることゝなつた。年内に忙しい用事をひかへて、ぼんやりしながら賀状を認めるとは違つて、落ちついて、楽しく、新年らしい気分で、宛名の人の幸福を祈つたりその過去を追憶したり現在や將來を想像したりしながら認めることが出来たのは、思ひまうけぬ喜びであつた。併し、一方では、はやく自分に賀状を送つて呉れた人に對して謝意を表したいやうな感じがしたのも事實である。賀状は自己一人の幸福を目的とするものでないことを思ふと、やはり年の内に認めて年賀郵便に托し、一月一日の郵便で配達されるやうにしなくてはなるまい。

例年は午前二時頃に賀状が配達されたが、今年も例日と同時刻の午前九時頃に配達された。これはたしかによいことである。郵便配達夫にとつても配達されるものにとつても。

去年の大晦日は思ひがけなくも雪降りであつた。私は自分や社の用事を済して午後八時半頃帰宅した。家人が年越の膳ごしらへをしてゐた時に、大正九年度の最終便を配達するための郵便配達夫が來た。而もそれは一ばん年をとつたそして足の悪い配達夫であつた。私共は彼に火鉢と一杯の冷酒とをすすめた。そしてこの一年間いろ／＼意義あるたよりの持ち運んで呉れた彼——彼等の勞を心から感謝すると共に彼の幸福を心から祈つた。

東京の暮は晴天が続いたと共に火事が頻發した。大晦日の雪は浮かれ易い東都人に文字通の冷氣を興へた。私は暮れ初めた大晦日の銀座の町を通りながら、恐らくは殆ど泣いてゐるであらう大道商人の心と、恐らくは漸く安心をしてゐるであらう消防夫警察官の心とを、かたみに思ひ比べていはうやうなき感慨に打たれた。

一月三日の夕方、私は原稿用紙を求めるために早稲田に行つた。そのかへりに昨年未焼けた鶴巻町を通つた。私の知つてゐるものが二人類焼の災に遭つたらしかつた。私はそれらの人達の不幸に同情しながら通りに出たら早稲田座の前は黒山のやうな人だかりであつた。百有餘軒の火事跡を前にして平氣で芝居を見ようとする人達を見ると私の心は息づまる程の苦悶を感じた。私は見てはならないものを見た時のやうに唾を吐いて急いで歸途についた。

□

數ある年賀状の中特に私の注意を惹いたものが二枚あつた。一枚は五年間音信不通な青年の賀状であり、一枚は三年間音信不通な女の人の賀状である。私共は時折この人達のことを思ひ出して其の幸福を祈つてゐた。時としては、數年間年賀状も寄越さないから恐らく凶事でもあつたではないかとさへ思つてゐたのに、幸にして無事な消息に接した。私はこの人達の疎遠を憎みながらも少からの歡喜を感じるのであつた。

□

最もあはれな人間は、附焼刃や焼直しや借り物で愚鈍な世間をごまかして得たふけば飛ぶやうな虚名を生命としてゐる人間である。我が教育界にも我が思想界にもかういふあはれな人間が決して少くない。私はかういふ人を思ふごとに「自己自身のものを持って！」如何に見えるかに心を配るよりも何であるかに氣をつける！」といひたくなる。併し、十分な意味で自己自身のもの——眞に獨自にして優秀なものを持つには、優れた天分と人の知らない多くの努力とが要る。たとへば、一個の教育の學説を主張するといふやうなことでも、平凡な人間が一二年努力したからといつて容易く爲し得ることではない。この意味で私は、兎に角何等か獨自な學説を建設主張する人を中心から尊敬する。併し、我が教育學界には果して眞に獨自なそして優秀卓抜な教育學説を建設主張しつゝある人がどれだけあるであらうか。

□

一月三日の午後電車で銀座に行く途中、日本橋の上で背に猿を負んだ猿廻しが二人にこゝろ笑ひながら立話をしてゐたのを見て、私は何となしに涙ぐましい心になつた。

近頃私は極僅かな間に三度學生（勿論別々な）だから不信な行動をされた。私は社會に出てゐる人だからだまされたより一層數層深い悲哀と強い憤懣とを感じた。

屋外教育を力説した文學者があつた。たしかに一面の眞理である。併し、これを教育の正道とせよといふことは一面に囚はれた見解である。問題の眞髓は屋内屋外といふやうな形式的なことにあるのではなくて、もつと精神的なことにある。教育者が教育の本當の意義を理會してゐるかどうか、本當の教育的精神を具へてゐるかどうか、といふことこそ問題の眞髓である。

永い間宅前を通るかまぼこやが、今年もまた正月の三日から大きなふれ聲で通つた。去年の暮までは箱を擔つてゐたのがこんどは小ぎれいな手車を曳いてゐた。私は何となしによろこばしく思つた。

吁澆季の世！ 最近の新聞紙を見ると思はずかうした歎聲を漏らさずにはゐられない。如何に醜いことのみ多いことよ、如何に憎むべきことのみ多いことよ、如何に憂ふべきことのみ多いことよ。殊に私は教育界の近狀を見る時に於て一層この感じを深くする。

歳月は流るゝが如しといふが、實に其の通りだ。三月の十二日は亡長男の七周忌だと思ふと、ひたすらに我が進歩の遅いことを悔い且恥ぢずにはゐられない。私は只、



この六年の間彼の二人の弟を愛して来たことを以て彼の靈に對することゝしよう。

正しく生きようとするものは良心の命令に従ひ易い境遇に身を置くことが必要である。私は自己の良心が是とするところに容易く従ひ得ない、今日の我が政治家の生活を憐れまずにはゐられない。世には中橋文相の最近の態度を非難するものが多いが、私はそれよりも先づ、確乎たる態度を取ることが出来ないやうな境遇に身を置いて苦しんでゐる彼の弱さを憐れまずにはゐられない。

大木法相が議會で、或る議員の非難に對して烈火の如く怒つたにの反して中橋文相はひたすらに辯解した。他人の非難に對して公衆の面前で怒ることが出来る人は幸福な人である。公衆の前で人格を蹂躪されながら憤怒することも出来ないやうな弱點を持つ人は不幸な人である。但し、其の非難が全然不當であつて省みて何等の疚しさを感

じない許りか、難者の人格が下劣であつたり或は非難の動機が陋劣であつたりするために黙過する場合は別である。私は他人の直接なとして不當な非難に對しては必ず或る程度の辯解をする。それは強ち毀譽褒貶を恐れるためではない。不當な非難を當然な非難と誤解して自ら高しとする難者の心事態度に憤慨するがためである。

私は最近しきりに「勇氣」の必要を痛感してゐる。勇敢なれ。勇敢なれ。眞に勇敢なるものゝみ眞理の殿堂に於て安んずの席次を見出すことが出来る。但し、眞の勇氣は聰明と熱誠とを打して一丸としたものであることはいふまでもない。

藤澤の講演會から歸京する汽車中のことであつた。折角ステイムで温まつた車室の硝子窓を遠慮なしに明け離してゐる男があつた。餘寒殿しい日の夕方のことであるから切るやうな風が流れ込んで来た。七つばかりの男の子が、其の母親に「おかアさ

ん寒いよ！」と小さい不平らしい聲で三度ばかりさゝやいた。母親は窓を明けた隣の男に遠慮してか聞えない振りをして黙つてゐた。私は見るに見兼ねたのと自分のからだに氣づかはれる虞があるのとのために、つと起つて窓を明けた男の前に行き、「洵に相済みませんが風邪をひくと困りますからお差問がなければ締めていたゞきたう御座います」といつた。と其の男は無言の儘で窓を締めた。

□

私は同郷會といふものを重大視しないものゝ一人である。勿論同郷會を全然無意義だとまでは考へてはゐないが……。吾々が他郷に出て活動してゐるのは、多くは郷里に對して何等かの意味で不満を感じてゐるためである。それを同郷人の寄合であるといふがために没批判的にこれを尊重すべき理由はない。勿論、相識の郷人のみの會合であれば別である。廣い舞臺に立つて活動するものは、宜しくこれらの謬見を打破して、主義思想目的理想人格を動力として提携すべきである。

□

自分の同郷から卓越した人が出たことを誇りとするものが世には決して少くないが、これ程馬鹿氣たことはない。「誇り」は自己其ものに關することではなくてはならない。自分以外の自分に近いものゝそれがたとひ自分の親でも兄弟でも――が卓越してゐるにもかゝはず自分が卓越してゐないのであるから、同郷や同學や知人の間から卓越したものが出たことは自分にとつては寧ろ恥づくべきことである。但し、これらの人達が卓越した人物になつたことが自己の助力とか激勵とか感化とかの結果であることが明白な場合に於ては別である。この意味で、適切な教育を施した爲に我が子や我が教へ子を卓越した人物とした親や教師は誇つてもよい。同様に、兄弟が弟妹の成功を誇とし、年長の友人が年少の友人の進歩を誇とし、長官が下僚や部下の榮達を誇とすることには比較的罪惡は少い。併し、これらの場合に於ける「誇り」は勿論主觀的のものでなくてはならない。他に現示することではなくて自分一人心ひそ

かに歡喜を感ずることではなくてならない。

□  
學に志すものは、何よりも深くなることを念としなくてはならない。本當の意味で卓越した専門家になることを念としなくてはならない。併し、本當の意味で卓越した専門家になるためには根柢を廣くすることが何よりも必要である。廣汎豊富な基本的教育又は豫備的修養が必要である。獨學者の長所は一科一方面に深いことであり、學校出の長所は根柢が廣く豫備的知識が豊富なことである。この兩面を併せ兼ねてのみ眞の學者となることが出来る。

□  
眞の専門家は一切の専門家を理會し敬愛する事が出来る。英雄が英雄を識るのである。自分の長所とする所を具へてゐないものを凡て輕蔑するやうなケチな人間は、到底本當に偉大な専門家となる事が出来ない。古しへの卓越した武藝家が、試合する時

には對手に好きな武器を持たせた心意氣を私は懐しいと思ふと共に、他人の長所などが一向目に入らない似而非専門家が私共の周圍に餘りに多い事を、私は悲しいと思ふものである。

□  
「驚異」は哲學の母だといふ。「泰然自若」は大人物の特色だといふ。斷えず驚異を感じながら而も常に泰然自若としてゐる人が眞人である。永しへに清新鋭敏な魂を所有して、刻々に新しい經驗をし、いつも人生と實有との神秘に驚きながら、而も其の新經驗を明にし其の神秘の真相を觀破しようとするものが眞人である。驚異のための驚異を欣ぶものは似而非詩人である。泰然自若のための泰然自若を誇るものは似而非道德家似而非科學者である。詩人の情感と道德家の意志と科學者の理智とを併せ兼ねたものが哲人であり眞人である。

習慣は兎角私共の魂から清新味を奪つて鈍感にし勝ちである。年をとるに従つて人の不幸に對する自分の同情が薄らいで行くのは悲しいことである。笑ひながら罪人の番をする獄吏、戯談をいひながら通夜をする僧侶、鼻唄をうたひながら瀕死の病人に侍する看護婦……これらの人々を思ふ毎に私はいはうやうなき悲哀に打たれる。悲哀に面接して心から泣き得る人は眞に不幸な人ではない。悲哀に面接して哀感が起らなくなつた人こそ眞に不幸な人である。

□  
子供にとつては勿論子を持つた親にとつても、子供をはじめて學校に入れるといふことは極めて重大な事件である。けれども教育者にとつては子供の新入學といふことは家常茶飯事に近い。新入學の際親と教師との間に面白くない關係が生ずるのはそれがためである。教育者は何處までも魂を清新にすることが必要である。幾度尋常一年を受持つても「新入學」といふことを絶對的に考へなくてはならない。子供にとつて

は「新入學」は初めての経験であることを念頭に置いて子供に對しなくてはならない。自分が初めて入學し、自分が初めて自分の子供を入學させる時の心を心として新入學生に對しなくてはならない。

□  
或日のこと、私は一番上の子供を初めて或る小學校に入學させるために抽籤に行つた。丁度其の日は子供が病氣なために私が代理したのである。私はこの日程子供に對して重い責任を感じたことはない。それと共に私は、定員よりも十數倍も多い志願者を見た時には悪感を感じずにはゐられなかつた。誰か人の親として自分の志望する學校に入學が出来ないことを悲しまぬものがあらう。併し人生の事實は嚴肅である。どれ程熱烈などれ程美しい親の愛を以てしても定員以上は一人の入學も出来ない。私は委員の高らかに読み上げる悪い籤の番號を聞く度毎に、可憐な幼子の泣聲なみを聞くやうに感じられた。——私の順番が来てよい籤に當つた時には、私及び我が子の幸福を欣

ぶと共に、私のために犠牲になつた他の一人の子及び其の両親や家族が氣の毒でならなかつた。

□ 子供の入學検査につき添つて或る學校に行つた。可憐な無邪氣な人の幼子たちを我が子の競争者—敵として見なければならぬことは、私にとつて大きなかなしみであつた。それにも増して私の心を動かしたことは、體格検査の係の醫者の不親切なことであつた。はじめてかうした經驗に遇ひ、さなきだに精神が一方ならず悸えてゐる我が子がたとひ入學を希望したためとはいへ、赤の他人からつつけんどんな言語動作であしらはれるのを見ては親たるものが憤慨するのは當然である。或る一人の母親の如きは殆ど涙を流さんばかりにして「もう少し親切にして下すつたら！」を繰り返してゐた。私の經驗に依ると小兒科の醫師に小兒の嫌ひなものが案外に多いやうだ。不思議なそして悲しむべき現象である。

□ 自分の職業をいやいやながらやつてゐることは不幸であると共に不徳義である。いやならばよすべし、やるならば喜んでやるべし。不徹底は罪惡である。

□ 子供の入學が許可されるや否や、洋服屋や靴屋がしきりに注文取りに來た。或る朝靴とカバンとを注文してやると側に居た子供が靴屋が歸る否や私にかういつた。——「お父さん、靴屋はありがたいね。お祝ひのハガキを寄越したり靴やカバンをこしらへて呉れたりして……」私は子供の無邪氣で淺墓な考へを笑ひながらも、私自身果してこの子のやうに感謝すべき人に感謝せず、感謝すべからざるものに感謝してゐるやうなことがないか否かを眞面目に考へずにはゐられなかつた。

□ 最近文壇で忌はしい一つの風評が傳つた。それは、對手の文學者の作物を露國語に

翻譯したから又は翻譯したいから作物を寄送せよといふ手紙を送つて著書を詐取するとのことである。これが本當なら洵に憎むべき行爲である。現に私の所にも同様の手紙が一昨年と最近と都合二度届いた。私は幸にして彼の需めに應じなかつたから、この奸手段にだまされた人達よりは憤慨の度が少いが、それにしても心持が悪い。さう甘く見られたことが残念である。併しこれはこの男のみに限らない。勿論外國語に翻譯するとか外國に留學したものとかいふやうなコケおどしはいつて居ないが、崇拜してゐるとか著書を全部讀んでゐるとかいつた後で最近の著書を呉れとか『創造』の最近號を送れとかいふことは殆ど判で捺したやうである。而もこの種の陋劣な人間が教育者殊に若い教育者であることを知るに於て私の悲哀と慨歎とは極度に達せざるを得ない。

□ 「真理は平凡である」といふ。少くとも人間が死ぬこと殊に老いたるものが死ぬことは

極めて平凡な真理である。それにも係らず人間の死は悲しい。早晚斯くあるべきことを豫期してゐた母の死ではありながら私にとつては悲しい。殊に私の歸郷が、母の臨終に間に合はなかつたのが悲しい。只二人しかない我が子の一人に會はずに永しへに死に逝いた我が母の心を思ふと、いふばかりなく悲しい。「追憶は凡て美だ」といふけれども私の我が母に對する追憶は凡て悔恨と懺悔とである。

□ 私が幾分なりとも世の中に知られるやうになつたのは母に對する何よりの孝行であるといふ意味で慰めて呉れた人が少くなかつた。併し、私としては茲にいはうやうなき悲哀がある。母は果して私をどれ程迄理會してあつたか、私が今日のやうな生活を送つてゐることが果してどれ程母に幸福を與へたか、私の本當の孝行と思ふことが母には何等の幸福をも與へず、私が極めてつまらないと思つて忽にしたことが母にとつて極めて大きな不満でありはしなかつたか。——かう思ふと私は衷心悲哀を感ぜずに

はゐられない。そして何等の理屈も考へずに、純な心から断えず母に仕へた少年時代を心から懐しく思はずにはゐられなへ。

死は人間を淨化する。我が母はたしかにさうであつた。死期が近づくに従つて次第に精神が平靜になり高潔になり温和になつて行つたことを、全力を盡して看護した兄から聞くことは、私にとつて限りなき悲しい喜びである。

母に對して感謝すべきことは勿論無數にあるが、就中私の最も深く感謝することは、「はたらく」ことの尊さを先天的にも後天的にも私の人格に根強く植え付けて呉れたことである。母は「はたらくのが病だ」と自ら云ひもし他人からいはれもした。今生時の母を追想すると、心の鏡にうつるものは皆きたない着物を着て働いてゐる姿である。ああ、あの懐しくも尊い姿、殊に仕事の手を止めて私を迎へつ送つた母の

姿が永久に我が郷家に見ることが出来ないと思ふと私の悲しみは極まりない。

母の死に遭つて私は郷黨人、わけても組合の人達や親近の人達の親切に心から感激した。三日も四日も家事を抛つて手傳ひ合ふことや、數里の雪道を厭はずに悔みに來ることなどは、たしかに美風として何時までも維持したいものである。他人の不幸を知りながら、顔を合せても悔み一ついはないやうな冷たい都人士の心を私は呪はずにはゐられない。

地方の葬式には色々の長所がある。併し短所と思ふ所も少くない。土葬は須く一日も速に廢すべきである。戸外の葬儀も賛成しない。「お念佛」といふものはよい習慣だが、三夜も七夜もするのは考へものである。死去の當夜と葬式の當夜とだけで澤山だと思ふ。お念佛に俗つばい上づつた調子が交つてゐたのは嫌らない。一體に雑々しく

且雑務が多くて、家族や近親がしみじみと死者を弔ふことが出来ないのは最も遺憾である。

母の死、亡長男の七回忌法要、病氣臥床、次男の入學、結婚の仲介——悲喜交々到るといふのが春光漸くうららかな昨日今日に於ける私の心境である。それにしても仕事が遅々として進まないのが心を痛める。

最近未亡人になつたばかりの某閨秀作家が物した亡夫君の追懷記を某誌で讀んで、私は少からぬ不快を感じた。亡夫の缺點を平氣で並べてゐたからである。

「教育擁護同盟」の相談會を帝國教育會で開いた一夜のことであつた。委員が宣言書を謄寫すると、命に依つて別席に控えてゐた二人の〇〇がそれに手傳つて呉れた。そ

の時は時間が大分晚かつた。私はこの人達の心理を考へて涙ぐまずにはゐられなかつた。

最近議會などでしきりと「徳義」とか「責任」とか「名譽」とかいふ道德的術語が使用されるが、使用者はこれらの語について果してどれ程の自覺を持つてゐるであらうか。——私は善言佳語の眞義について何等の反省なしに亂用する人の中にこそ、本當の意味の道德と乖離するものが最も多いやうに思はれてならない。

「金さへあれば」といつて貧乏のために苦しんでゐる人が世に少くないが、金だけで解決出来る問題は本當の難問題ではない。千萬金を積んでも解決の緒口さへ見出し得ないやうな問題こそ本當の難問題である。そしてこの種の問題は私共の周圍に決して少くないのである。



數へ年三つになる私の三男が、ある時鏡にうつた自分の顔を不思議さうに眺めてゐたが、暫らくするとそれを裏返しにして見て一層不思議な顔をしてゐた。その後寫眞を見せた時にもこれと同様な動作を繰り返した。これを見て私は到底笑ふことの出来ない嚴肅な感じに打たれた。ひとり鏡や寫眞ばかりでなく、凡そ何事でも表面のみを見ただけで満足しないで、裏をかへして見る程徹底した周匝な觀察や思索によつてのみ、はじめて對象の真相（に近いもの）を理會することが出来るのに、私だけは多年の因襲に囚はれてゐるために、何事も鏡や寫眞のやうに表面を一瞥しただけで満足してゐるからである。

寫眞で思ひ出したが、第二回全國教育雜誌記者大會の記念寫眞を明治會館の玄關でうつす時のことであつた。時刻が晝食後であつたし天氣もよかつたので、門前には子

供は勿論大人まで集つて見物してゐた。私はこれを見て失笑を禁ずることが出来なかつた。何故なれば、彼等は私共を見物することに氣を取られてゐるあまり、倒に、彼等自身が私共大勢から見物されてゐることを忘れて、きよとんとした目付をしたり口を開いたりして平氣でゐたからである。

哲學を學んだものとさうでないものとの一つの區別は、前者は主觀に於て客觀を見、客觀に即して主觀を考へるのに對して、後者は主觀を主觀としてだけ客觀を客觀としてだけしか見ることが出来ない點にある。

郵便配達夫が配達すべき葉書を読みながら歩いてゐる所を私は幾度も見た。その度毎に私は彼等の不徳義を憤慨しながら、而もさうして僅かにドライな彼等の仕事から幸福を見出してゐる彼等をあはれに思はないことはなす。

人間には一人として完全なものがないかぎり、時としては道に外れるのも止むを得ないことである。勿論人間は常に道に外れないやうに心掛けることが必要であるが、それと共に、一旦道に外れたならば潔く其の應報を受けるやうにしなくてはならぬ。苟くも意義ある生活を生きようとするものは、善悪を問はず、自己の言動に對しては何時でも立派に責任を負ふだけの覺悟が必要である。犯罪や失敗が發覺されるやうになつてから、あはてゝ揉み消しに取りかゝつたり自殺をしたりするが如きは輕蔑憫笑の外はない。罪惡を償ふ道は、進んで其れの應報を受けると共に、出来るだけ多くの善事を爲ることを他にしてはないからである。

教養あり地位ある人達の中に、罪惡の發覺に際して見苦しい心事態度を取るものが多いのに對して、熱海線墜道崩壞の慘事に際し、十七名の工夫達が八日間土の中に入

づもれ、草鞋の藁を噛み、水をすすつて露命をつなぎながら、周章も狼狽もせず、互に勵まし合ひ互に注意し合ひ、或るものは日誌や書置をさへも認めたりして、靜かに救助の日を待つてゐたといふ、悲痛にして嚴肅な話を聞くことは限りなき喜びである。尙この救助工事の際に、八日間不眠不休で掘りつゞけた老工夫があつたのも近頃うれしいことの一つである。

春が来たので私は着物を一枚脱いだ。うすら寒くはあつたが身輕なのが私に幾分の快感を與へた。それと共に私は、暖くなるにつれて一日／＼と貧乏な人たちが生活し易くなつて來ることを思ふといひ知らぬ快感を覺えるのであつた。

私は保證人といふ資格で或る女子専門學校と女學校とを兼ねた學校の卒業式に臨んだ。私は先づ出席の保證人の案外に少いことを遺憾に思つた。校長の訓辭や來賓の祝

辭が一向其の學校の卒業生にふさはしくなかつたのが遺憾であつた。私は「美術を専門にするこの學校の卒業生が、美術的藝術的教養ある婦人が社會なり家庭なりに入つて國民生活の藝術化を試みることに我が國家當面の急務であり、隨つて當校の卒業生の使命が極めて重大であると共にその幸福が甚大であるから奮發努力して欲しい」といふやうな意味の訓辭なり祝辭なりがあつたら、卒業生たちは何程か感激することであらうと思ひながら、月並な訓辭や祝辭を聽いてゐた。それよりも私の物足らなく思つた事は、卒業生の態度氣分が緊張味を缺いてゐることであつた。後の方には訓辭や祝辭の時に起立しないものもあつた。私語するものもあつた。卒業の歌を歌つてゐる際に合唱するかはりにゲラ／＼と笑つてゐるものさへあつた。勿論、涙を流してわかれを惜しむやうなしほらしいものは一人も見當らなかつた。私は、哀しいメロジに涙が流れて、「仰げば尊し」の卒業の歌がうたへなかつた自分の小學校卒業當時のことを追想していひ知らぬ涙を双眸に湛えてゐた。

悲しい不快なことは最後まで續いた。私は愛用の洋傘を取り代えられてゐた。玄關には接待役の教師と生徒とが七人と下足番の小使が一人ゐた。客は僅に二十人に充たない少數であつた。それにも係らず、合札まで渡した私の洋傘が取り換えられたのである。使ひ古しではあるが絹張の洋傘と、殆ど使用に堪へない洋傘とを白晝堂々と取り換えたものが、女學校の保護者か來賓かの中にあつたといふことは私にとつて無上の遺憾である。これと共に、前後八年間春夏秋冬如何なる旅にも私の手に携へられた親しみの深い洋傘が、不徳義漢の穢れた手に使用されつゝあるかと思へば、私の悲哀は極まりない程である。私はこの學校當事者の無責任に憤慨しながらも、保證人として式に臨んだ目的を考へて何も云はずに辭し去つた。

□

最近、各種の雑誌が競つて大きな新聞廣告を掲げるやうになつたが、これは斷じてよいことではない。殊に社會主義的な色彩が最も濃厚であり、資本主義の打破を標榜

する某誌が最も大きな広告を掲げるのは自己撞着も甚だしい。雑誌がこの種の唯物主義的な形式主義的な人々たちによつて經營されるかぎり、到底何時までも眞の意味で社會の木鐸たることは出来ない。

三月末の或る夕暮のことであつた。私は疲れたからだをうちに運ぶ途中強い新芽の香に鼻をうたれた。私は鼻をうごめかして其の香を心ゆくばかり吸ひ込みながらそこからあたりを見廻したが、勿論何の木の芽の香かは一向わからなかつた。私は酔つたやうな快さを感じると共にいはうやうなき寂しさを感じずにはゐられなかつた。——夕闇にも人の鼻を打ち人の心を動かすことの出来る強い其自身の力を持つてゐる點では木の芽にだも及ばない自己の劣弱さを自覺したからである。

芝居ではよく「持味」といふことをいふが面白い言葉である。個性とは結局持味の

ことである。青葉若葉の香や花の薫りが草木の持味である。自らたゞよひにぢみ出る味ひが人間の本當の味ひである。夕闇にもかぐはしい香を放つやうな人間、きたない泥水をいつも風情あるものとする蓮、むさぐるしいごみだめをさへも美しくする鶴、おそろしいとげをすらやさしく見せる薔薇のやうな、どんな醜惡な環境にあつても自ら白光がきらめき、どんな冷索な雰圍氣の中にあつても温い風が自ら吹くやうな人であつてこそ、眞に尊敬することの出来る人である。

私は生きものが好きである。獸物も禽鳥も草木も好きである。子供の時代には、春の初めになると近所の畑地の間を杏や李や梨の芽生をさがしあるいた。柔かな土から出立ての未だ種殻の取り切れない若々しい芽生を見つけ出した時の歡喜は今でも忘れることが出来ない。小鳥も私の少年時代の大切な伴侶であつた。こがらやしじうからや山がらやごじうからや木はしりやひわや目白は、幾度か私の茅屋の鳥籠に飼はれた

ことであらう。私はかういふ鳥の鳴聲は大抵口笛で真似ることが出来る。今年の春も例年のやうに鶯が私の小庭に来て啼いたので、私は何気なしに數へ年三つの子を對手に口笛を吹くと、隣家の十二三の少年も同じやうに口笛で鶯の啼聲をした。私はこの刹那に氣恥しい氣分になつたが、それと共にいふにはれないスウィートな感じがした。犬も私の少年時代の仲のよい友達であつた。わけても長い間飼つて置いて病死した犬のことは今だに忘れることが出来ない。東京でも友人から生れたばかりの犬を貰つて育てたが、行方不明になつてからは可哀さうになつて一度も飼つたことがない。——或る春の日曜日の朝、小さい子を懷いて近所を散歩してゐるときに綱付の犬を連れて人に出會つて、私はフト以上のやうな追想に耽つた。

□  
犬に綱をつけて連れて歩く人や、人混みの中を小さな赤ん坊を連れて行く人を見るのは、私にとつて厭はしいことの一つである。

□  
はじめて小學校に入學した次男がはじめて自由畫——自動車の繪を描いた雜記帳を見たら、ふだんうちで描いてゐるものよりもずつと拙かつたので、私は思はずかう叫んだ。——「うちでうまく描いたつて學校で拙く描くなら何んにもならないぢやないか！」そして私は其の次の刹那に於ていはうやうなき後悔の念に苦んでゐた。ふとした油斷から取返しのかかない失言をしたことをさつたからである。

□  
山田憲は遂に斷頭臺上の露と消えた。入獄後の彼の動作、別けても斷罪の當日の彼の言動を思ふと、一掬同情の涙を灑がずにはゐられない。憲は兎に角として、最も哀れなのは彼の家族殊に彼の老母と遺兒である。それにしても憎むべきは憲の妻の父の心事態度ではないか。世に最も憎むべく且最も憐れむべきは似而非道德家である。——憲が斷罪の日に着るための着物を新調した彼の妹氏の心情を、私は涙なくして想察す

る事は出来ない。

□

毎日の新聞紙がこの頃特に強い期待をそゝるのは、市疑獄事件の記事があるためである。そして其の記事中召換者收監者の身分が高ければ高い程多くの痛快を感じるのは事實であるが、これは果して何に因由するであらうか。犯罪者が正當な應報を受け、犯罪が抉剔されるのを喜ぶのはよい。併しながら、其れと共に有爲の士が不謹慎のために犯罪者の汚名を受けたり神聖なるべき自治生活が罪惡の巢窟になつたりしてゐることに對して心からの悲哀を感じずる人にのみ、はじめて犯罪者の所罰や犯罪の抉剔を痛快とすることが許される。

□

新宿の大火の當夜であつた。未だ罹災地がはつきりしないのと其の方向に親族や知己の住宅があつたので、私は驅出して江戸川の交番に行かうとしたら、大日坂の途中

で新宿三丁目だといふことが判つたので安心して引き返した。高臺には多數の人達が見物をしてゐたが、彼等の多くが笑ひさざめいてゐるのが心外であつた。やがて一團の黒烟が悪鬼の吹息のやうに朦々として立ち登つた。新たに建物が焼け落ちたのであらう。その刹那に「痛快！痛快！」といふ大きな若々しい叫聲が見物の中から聞えた。私の心は一度に暗くなつたやうに感じられて急いで驅け出した。

□

四月九日の日曜日は東京の櫻が見頃であつたのに加へて詠への好晴であつたので、櫻の名所は何處も賑はつたらしい。花見は民衆娛樂として最もよいものである。併し馬鹿氣た假裝をしたり酔つ拂つて踊り狂つたりしなければ花見の幸福を享樂することが出来ないものは、眞に花を見るものといふことが出来ない。否櫻を見に行くものに花の趣味を理會するものは少い。櫻は其の色にも形にも何等複雑な美も深刻な美も顯著な個性もないからである。少くとも私は満開の櫻花には大した美を感じることが出

來ない。私が美しいと思ふのは、八重の五分咲か夕暮のそよ風に一重が雪のやうに亂れ散る風情である。

□  
また國技館の夏場所が始つた。新聞に出る相撲の勝負付を見る度毎に私はいはうやうなき哀愁を感じる。殊に新進者が大立者を倒した時にさうである。相撲取の盛衰が餘りに速だからである。勝敗の區別が絶對的だからである。勝敗の原因が餘りに單純だからである。人生は戦であると信じてゐる私は必ずしも相撲を無下に排斥するものではない。併し、自分の友人を傷つけなければ自分の地位も名譽も幸福も保てないといふことは悲しいことである。この意味で個人主義者でなければ相撲取になつてゐられないし、相撲の好きなものは個人主義者だといつてよい。芝居はこの點で相撲と殆ど正反對である。優れた役者は、自分の長所を十分に發揮すると共に他の凡ての役者——端者に至るまで——の長所をも十分に發揮させるものである。一人の役者の成功

は凡ての場合（たつた一人でする場合以外は）必ず他の役者の成功を意味すると共に他の役者の成功に俟つのである。倒にいふと、芝居では、他の役者の長所を傷つけたり抑へたりすることは、とりも直さず自分の長所を傷つけ抑へることである。實に、芝居は、對人道德の形式たる競争に即する協力が最も完全に行はれてゐる——少くとも行はれ易い所である。——私が芝居を好む理由の一つはやがてこゝにある。

□  
人生に於ける眞の勝利は、他を傷つけたり負かしたりすることではない。一切の人を生かし一切の人を勝たすことこそ、眞の勝利である。随つて愛——創造的の愛こそは、人をして眞の勝利者たらしめる武器である。

□  
すが／＼しく晴れた晩春の或る朝のことであつた。私は眼鏡のねぢを直しに態々神樂坂の或る眼鏡屋を訪ねた。店には十六七の小娘しかゐなかつた。その娘が眼鏡の直

しに取りかゝつたが、暫くするとパチンと球を割つて仕舞つた。と、奥から主人が出て来たが、娘の申譯を聞いたきりでも何にもいはずに奥に姿を消した。やがて母親が出て来て流石に二言三言口小言をいつたが、それでも自分で手を下さうとしなかつた。娘もまた平氣で代りの球にねぢを箆めてゐた。私はいふにいはれない悲哀と共に一味の愉快を感じずにはゐられなかつた。娘の過失は、關係者の凡てに損失を與へるが誰にも聊かの利益をも與へないといふことは限りなき悲しみであると共に、兩親が過失を犯した娘を信賴して、どこまでも仕事を仕上げさせるやうにするのも、娘が過失を犯した上に小言をいはれながら悪びれもせず周章でもせずに自分の責任を果さうとしてゐることも、等しく喜ばしいことだからである。——私は妙に甘酸ばいやうな複雑な感情と後で母親が娘を叱りはしないかといふ懸念とを懷きながらこの店を出た。

□  
長閑な仲春の一日、家族と二人の少女とを連れて國技館の衛生博覽會を一覽した時

のことであつた。餘興の娘たちの曲藝が私の心を強く動かした。一人の娘が肩の上に長い竹竿を立て、それに二人の少女を登らせた。登つた二人の少女たちはそれ／＼の位置で藝を演じた。私は藝の巧妙に感歎するよりも寧ろ巧妙になるまでの長期間に亘る火の出るやうなそして文字通に懸命な練習を想つて戰慄した。二人の少女の生命の鍵を握つてゐる娘の重い責任と、自分の生命を一人の娘に委ねて藝を演じてゐる二人の少女の強い信賴と、更に責任と信賴との渾融の結果として生じた藝術の三昧境とに激しい感激を覺えた。一寸でも仕損ずれば、自分か仲間か其の兩者か、立所に命を失ふやうな瀬戸際に終生立ち盡すことを職業とせねばならぬ彼等の生活の悲痛と不幸とに強く心胸を打たれた。

數字や國旗やのわかる犬の曲藝も私にかなり強い感動を與へた。私は勿論犬の利口なのに感心した。それよりも、耳を垂れ尾を垂れて數字を記した木の札を捜してゐる可憐な姿と、巧に當てたのを見た犬使ひの喜びとに強く胸を打たれた。否、それよ



りも更に強く私の心をうごかしたのは、その犬が藝が終ると知るや今迄とは全く別な犬のやうな元氣で一飛びに樂屋に駆け込んだことである。難かしい藝當から解放された彼の幸福を推察したと共に、四時や五時の時計と共に全く別人のやうな元氣で役所や會社や學校などから解放されて家路を急ぐ多くの勤め人の姿を彼の姿に見出したからである。

西村・石井・與謝野氏等の「文化學院」の開校式は普通の開校式などには見られない光景であつた。「大正の寺子屋」だと誰かといつたが、たしかに私塾的である。凡てが素人くさく非職業的である。友人を代表して祝辭を述べた有島生馬氏が「お七夜」を「初七日」といつて仕舞つたのは、他の學校なら恐悚の極みであるべきものが、茲では笑ひ消されて仕舞つた程空氣が柔かであつた。それにしても私の遺憾に堪へなかつたことは、列席の生徒達を式中何にもさせずにはうつて置いて最後に唱歌を歌はした

ことである。四十人ばかりの女の子であるから勿論おとなしくはして居たが、どんなに自分達の活動すべき順番を待ち倦んでゐたかと思ふと私はいぢらしくてならない。私なら生徒の唱歌で式をはじめ式を閉ぢたいところであつた。

最近催された會合中最も馬鹿げたものは、某閣僚の催した大食會とかいふものである。失業者が續出する昨今、如何に食ふに困らない人達だからといつて、餘りに世の中を馬鹿にした催ではないか。由來無自覺なものは大物食や大酒吞を自慢にしたがるものである。世の中にこれ程無意義な自慢はない。品性や知能でさへ先天的なものは自慢にはならない。況んや飲食をや。否大食や大飲しなければ満足されないといふことは、寧ろ文化人としては恥づべきことである。酒が強いといふやうなことも同様に自慢にはならない。只それが、何れ程多量の酒を呑んでも精神の持ちやうで少しも酔態を演じないといふのなら幾分稱するに足るけれども。

十年一日の如く私の宅の前を毎朝夕どぜうやあさりを賣り歩いてる男がある。或る夕方私はふと彼の振れ聲を聞くと、其の榮えない生活に少からぬ寂寥と慊焉とを感じて、ひとり言のやうに「ようくあんなつまらん商賣を何時までもやつてるもんだなア」といふと、傍にゐた妻が「あんな商賣を永くやつてるのがまだいゝんぢアないでせうか？ ほんとうに悪い人ならいつまでもあんな商賣をやつてるやうなことをしないで何か悪いことをするでせうから」とこれもひとり言のやうにいつた。——暫らくの間私は自分がどぜう賣よりも妻よりも數段劣つた人間のやうに感じられてならなかつた。

大掃除の日に屑屋が「拂ひ」を求めて戸口に立つた。家人が何にもないと斷つても暫らくぐづくしてから去つたので、私は戸口に出て見た。その刹那私は強い苦痛を

感じた。私が戸口に出て見たのは、ひよつとすると何か無くなつてゐはしないかといふ懸念があつたためであるのに、出て見ると一物も紛失してはゐなかつたからである。用心のためとはいへ罪もない屑屋に疑念をかけたからである。

數ある俚諺や箴言などの中でいやなもの、一つは、「人を見たら泥棒と思へ」といふのである。

はじめて學校に入つた子供のはじめての成績が學校から通知された。成績に對する受持先生の見方と私の見方とが一致したのが何より嬉しかつた。中でも操行が「良」とあるのは、親としての私にとつて悲しい喜びであつた。「お稽古は出来るが御行儀が少々いけない所がある」と常々教訓して置いたことが、單に親だけの考へではなくて受持の先生の考へでもあるといふことが、子供に對して權威のある教訓になるからで

ある。私は通知簿を前にしてペソをかいてゐた我が子の頭を撫でて、「これまでのことは仕方がない。奮發すればどんな悪い人でもよくなるんだから力を落さないで奮發するんだ！」といった。

□

細い雨が絲のやうに降つてゐる梅雨時の或る日のことであつた。私の小庭に三羽の雀が下りてチー／＼囀りながら何やら餌を啄んでゐるらしかつた。私は見るともなしに彼等を見てゐると、一羽は親雀で二羽は子雀であつた。そして親雀はちつとも食べないで二羽の子雀に交る／＼嘴から嘴へ餌を與へてゐた。私はあまりのいぢらしさに、さうつと一握の米を撒いてやると、如何にも嬉しさうに囀りながらすつかり食べさせて仕舞つた。この時から数日の間、私の家族は數へ年三つの幼子に至るまで雀の鳴聲が聞へると庭に米を撒いてこの可憐な親子の姿を眺めることを一つの楽しみにした。

□

私は貧乏人のくせに下駄は比較的よいものを履くの習ひとしてゐる。これにはいろいろの理由があるが、土を履むためにさなきだに兎角穢くなり易いといふことや、よそに客に行つた場合に穢い粗末なものではそれを直す人達や、立派な玄關があつたり立派な來客があつたりするうちの人達に不快感を與へがちだといふことなどが、その主な理由のやうである。併し、中々氣に入つた下駄は求められない。私は近所にある數軒の下駄屋からいろ／＼の下駄を求めた結果、或る一軒を買付にすることに定めた。そこは品のよい點で信用することが出来ると思つたからである。最近も相當の値段で一足の下駄を求めた。所が、それが三度目に片一方が割れて仕舞つた。私は早速使を出して取り代へさせた。而もそれがまた三度目に兩方共割れて仕舞つた。併し鼻緒が一向痛まないのので、別な店に使をやつて臺を取り代へさせた。ところが使が歸つて來て其の下駄屋の主人が「〇〇屋さん（前の下駄屋）は仲間からも信用のあるかたい店だのにどうしてこんな支那桐などをそんなに高く賣つたんでせう」といつてゐ

たといふことを話した。私は先づ自己の不聰明を恥ぢると共に前の下駄屋のために遺憾に堪へなかつた。

□  
人間の眞價を正しく評價しようとする人は、背景といふことを考へて見なくてはならない。よい背景があるためによく活動が出来たり又はえらく見えたりする人は必ずしも眞に卓越した人といふことは出来ない。——何等の背景もなしに自分自身の力でよく活動し、自分自身の價値のためにえらく見える人こそ眞に卓越した人である。肩書や團體の名を振り廻したり、知己や先輩や友人に優れた人が澤山居ることなどを吹聴したりすることによつて、自分のえらいことを相手に知らさうとするやうな人間には決して尊敬すべき人間は居ない。

□  
我が國では、宮内大臣とか内務大臣とかになると必ず伊勢大廟桃山御陵を參拜する

といふ習慣になつてゐる。これはたしかによいことである。けれども、大臣になつてから特に參拜するとか、大臣又は宮内大臣や内務大臣だから特に參拜するとかいふことは意味を成さない。況んや參拜しなへすればよいといふのでは尙更無意義である。人間の行爲は凡て精神が主である。殊に信仰や宗教に於てさうである。大臣になつて參拜することを稱するはよいが、參拜しないからといつて國賊呼ばはりをするが如きは斷じて誤りである。

□  
最近いろ／＼な雑誌社から來た問合せの往復ハガキの中で、「山縣公が死んだなら」といふ問題の記された葉書程いやなものではなかつた。

□  
また長旅に出る時が近づいた。本當の旅行好は旅の面白味は汽車旅行汽船旅行ではなくて徒歩旅行にあるといふが、私は必ずしもさうばかりは思つてゐない。少くとも

晝間であり且未知の土地であれば、汽車旅行汽船旅行にも無限の面白味がある。文字通に刻一刻と變化する新奇な光景を坐りながら送迎することが出来るばかりか、飽きれば好きな書を繙き疲れれば肘枕をして眠ることが出来るからである。で、私は旅をする時にはどうかして夜行を避けたいと思ひながら、いつも時間の都合でそれが出来ないのは残念である。

□  
夏になると、凡ての生活が簡易になり随つて人間の交渉も虚偽の分子が少くなる。只遺憾なことは、表通の戸障子が簾戸や簾になることである。往來を通る時に、簾の中から冷笑らしい笑聲や非難めいた言葉などを聞くことが少くないからである。

□  
東京市疑獄事件の豫審が終結した。新聞に出た決定書を読んで痛快を感じた市民は多かつたであらうが、苦い責任感を感じた市民は果してどれだけあつたであらうか。

私は、永い間殆ど寢食を忘れてこの事件に従事した判官たちが新聞記者に語つた談話を讀んで、心から愉快に感ぜずにはゐられなかつた。彼等の殆ど凡てが何等自惚らしいこともいはない許りか、却つて自分達の取扱に缺陷があるかも知れないと謙遜し、或る人の如きは、斯くの如き豫審決定をせざるを得ないことは國民として大なる恥辱であると言へいつてゐるからである。

□  
世の中には職業が随分多いが、私は裁判官殊に検事程つらい職業は少いと思ふ。少くとも人間性について深い理會を持つた人間にとつては、苦悶なくして裁判官殊に検事を勤めることが出来ない。私は、常に深い悲哀と大きな苦悶とを抑えて、ひとへに正義のために、冷靜に森嚴に刻烈に求刑の論告をする人達に對して、衷心同情と敬意とを表すると共に其の自重を祈らざるを得ないものである。

書物屋の店頭に立つて見て驚くことは子供の雑誌の多いことだ。私のやうに子供の讀物について幾分注意するものは殆ど選擇に迷ふ程である。事實時々失敗することがある。或る時大きい子に型の大きな雑誌を買ひ、小さい子に型の小さい雑誌を買つて歸つたところが、小さい子は小さい雑誌を喜ばないでどうしても大きいのが欲しいと言ひ出し困り果てたことがある。これは決して雑誌に限つたことではない。由來子供は大きなものが好きである。自分の下駄を穿かずに父親や母親のものを穿いたり、大人の帽子を冠つたりして喜んでゐるものである。この點から見ると、小型雑誌は子供の心理に反するものである。

□

又してもうら盆が來た。骨肉をはじめ死に逝いた人々のことがそれ／＼深い悲哀を伴つて想ひ起される。今年の盆には、小さな私の佛壇の中に四つの戒名の記された位牌が飾られてゐる。勿論二月十八日に亡くなつた母の位牌が一番新しい。それだけ位

牌に對しても佛といふ感じがしないで、その前に立つと亡き母の生ける姿のみが歴々と目前に彷彿して熱い涙を誘ふのである。

私は佛教は勿論あらゆる既成宗教を信じないものである。併し、死に關する佛教の儀式や傳統には首肯するに足るものが少くない。樂器がよい。お經の讀み振もよい。坊主頭もよい。袈裟衣もよい。蓮の花もよい。提灯もよい。「寺小屋」を想ひ出させる門火もよい。——併し、私がこんなことがわかるやうになるためにはどれ程苦しい悲しい經驗を嘗めたか知れない。「よい」といふのは、死に、死を葬ふ心にふさはしいといふことだからである。現に私は、この文章を書きながら悲哀の追憶に胸が一ぱいになつてゐる。

□

近頃まで或る相當の地位にあつたもので本國外の法廷で被告となつたものが東京に歸つて來た時、東京驛に待ち構へてゐた寫眞班を追ひ拂ふためにステッキを振り廻し

たといふことであるが、洵に愚劣極つた話である。寫眞班を追ひ廻すのは寫眞を撮らせないため、又寫眞を新聞に掲げさせないためであるのに、實際は一向其の目的が達せられないばかりか、却つてステッキを振り廻した醜態が鮮かに寫眞に撮られ、新聞に掲げられ、随つて一層多く人目を惹くからである。併し、これは決してこの男のみに限つたことではない。寫眞をさらふ婦人などが、顔だけ半ケチや袂で蔽ふのもこれと全く同一結果を惹き起すに過ぎない。

□

後めたい所のある者が自分の姿を人に見られるのを恥ぢるのはよい。併し、それは單に新聞紙上の寫眞のみに限るのではない。顔だけを蔽ふが如きは所謂「頭かくして尻かくさず」の愚である。誰もゐない、誰からも見えない所で、自分が自分の姿を恥ぢ、自分が自分の心をも行ひをも醜しと思つて、居たゞまられない程の苦しみを感ずる人にしてのみ、はじめて寫眞班を恐れることに意味が生ずるのである。けれど

も、かういふ人は、斷じて寫眞班の襲訪に遇つた際にステッキを振り廻したり顔を隠したりするやうな愚舉には出でない。

□

外から見える自己の醜惡よりも自己一人のみの心眼に見える醜惡を恥ぢる人のみ、眞生活の道程に上ることが出来る。

□

或る時鼠籠に一匹の子鼠がかかつた。其の儘にして湯殿に抛つて置いたら、ちよいちよい大きな鼠——親鼠(?)が籠の側にやつて来てチュ〜く鳴いてゐたが、何時の間にか子鼠の姿が見えなくなつた。其の翌日餌を代へて湯殿に籠を置いたら、日中にも係らずこんどは親鼠がかかつた。終日其の儘にして置いたが勿論子鼠の來た様子は見えなかつた。私は當然の事とは思ひながらいはうやうなき寂しさを感ずるのであつた。

濱田榮子の自殺が世人にかなり強いショックを與へた。毀譽半ばするといふよりも寧ろ同情者が多いのは時勢の進歩である。併し、私は彼女の自殺を推稱するものに與することは出来ない。彼女の自殺の動機が純でなかつたからである。自暴自棄とか面當とかいふやうな不純な分子が介在してゐたからである。ひたすらに我が夫を愛する至情からの自殺ではないからである。私は只々心から彼女の不幸な死に同情するのみである。それにしても、憎むべく憐れむべきは、彼女——我が子をしてかやうに不幸な境遇に墮さした彼女の母である。

盛夏の候となつた。私は避暑しなければならぬ程疲勞してもゐないし、悠々避暑し得る程餘裕も持つてゐない。只私は弱い子供や疲勞してゐる妻などのために何處かに行きたいと考へてゐる。勿論五日でも七日でもよいから、細々した雑事から解放さ

れて、ゆつくり好きな本を讀んだり伸々と子供と遊んだりすることに少からぬ興味を感じてはゐるが、但し、私は湯のある避暑地が最も好きである。勿論静かな所程よいが、女や子供を連れての身にはさうは行かないから、便利がよくて比較的静かな所に行くことにしてゐる。で、この三四年は何時も伊豆方面に行くこととしてゐる。そして宿屋もなるべく身分相應の所を選んで、つまらないことに氣を使はないやうにしてゐる。

私は湯が好きだ。自分のうちでも一日の中に四度や五度入ることは夏なら珍しくない。湯治場などでは尙更である。一日に七度位入ることは何でもない。ぬるい位の湯にたつた一人ひとでつかりながら考へるともなしに色々なことを考へるのは、ふだん目の廻る程周章ただしい生活をしてゐる私にとつては大きな幸福である。



夏になると夜分には飲み物屋や食べ物屋が目につく。表戸が外されたり簾戸になつたりするからである。男女を問はず、配遇者や子供のあるらしい相当年配の者が一人で飲んだり食べたりしてゐるのを見ると、私はいはうやうのない不快な感じに打たれる。飲み食ひは相手があつてはじめて本當に味はひのあるものだからである。殊に、年の若い丸鬚の婦人などが只一人で氷店の隅の方に急しさにさじを動かしてゐる様子などを見ると、不快を通り越して哀憐の情を催さずにはゐられない。

□

安房の講演に行く時のことであつた。兩國で汽車に乗ると私の側に一人の男と二人の若い女が乗つた。女達は流行の粹を集めた盛装で如何にも淑女らしくつゝましやかな立派な振舞をしてゐた。所が、車が津田沼邊りを走る頃には、バスケットの蓋を開けてしきりと西洋菓子を白い指で抹んでゐたが、これが北條を過ぎても尙繼續してゐた。私は心中只呆然たるのみであつた。

汽車などでよく見かけることであるが、時でもない時分に食事をしたり、殊に酒やビールなどを飲んだりするものの態度が如何にも自慢らしく見えるのは、ひとり私の僻目だけであらうか。かういふ人達を見ると、私は見物人の姿をジロ／＼眺めながら平氣で人參などを食べてゐる動物園の猿を聯想するのである。

□

東京で贗孤兒を利用して不正を働いてゐるものが檢舉された。子供を使つての悪事だけに餘計に憎らしい。それよりも私の惧れるのは、これがために、今後世人が本當の孤兒に對しても同情しないやうになりはしないかといふことである。

□

「様と寝ようか三千石とろか、儘よ三千石様とねよ」私にはこの歌の心が幾分わかるやうである。人情は直ちに人格ではないが、人情に缺けた人格は眞に偉大な人格ではない。學者殊に科學者には人情のわからない冷たい人間が中々多い。卑劣な策畧で糟

糠の妻を捨てた北大の某助教授の如きはその一例だ。實際はまだ多く多い。それから見ると石原博士は人情を解するものである。人生は方程式では解けないからよいのだ。妻を捨て得ず、情人とも切れることが出来ないで苦悶してゐるところに、博士の「人間」としての価値がある。

戀を知らぬ人がデモクラシーを説いても階級打破を要めても人道を叫んでも空言に過ぎない。人は情に於てのみ平等であり得る。情に生きてのみ平民として生き得る。情を解せぬ人を私は愛することは出来ない。併し、情は人を生かす力であると共に人を殺す力である。眞に価値ある情は勿論人を生かすものでなくてならない。情を知れ、そして情に囚れるな、そこに困難がある。今の教育は果して情育について正しい態度方途をとつてゐるであらうか。

□  
秋が来た。秋が来た。秋が来た。——私の好きな秋が来た。

秋は通例寂しいものとされてゐる。けれども秋ばかり寂しいのではない。人生そのものが寂しいのだ。春夏秋冬何時も寂しいのだ。何時も悲しいことがあるのだ。只いつもは気がつかずにゐるだけだ。落葉を見て、星の燦きを見て、蟲の音を聞いて、はじめて寂寥や悲哀を感じるのは鈍感である。本當に考へれば秋は寂しくも悲しくもない時ではないか。少くとも秋の寂寞と悲哀とは外的感覺的ではないか。澄める氣、高い天、涼しい朝夕、身體の健康、精神の明澄……秋は寧ろ眞に幸福な時である。センチメンタルな悲哀を超越せよ。月並な悲哀觀を打破せよ。そして自己に徹せよ、眞に徹せよ。人生は悲しい、そして楽しい。秋は悲しい、そして楽しい。併し、眞の人生は楽しみや悲しみ以上である。

秋はよい。兎に角よい。私たちに深く考へさせるだけでもよい。秋が来た。明かな頭腦を一層明かにして深く考へるべき秋が来た。私の好きな秋が来た。

私は七月の末から八月のはじめにかけて一ヶ月餘りを旅で過した。「可愛い子には旅をさせろ」といふ諺は、今日では其の眞實性が幾分減殺されたやうではあるが、實際旅をして見ると流石に味はひのある言葉であることが理會される。

□

汽車の旅と船の旅との間には截然たる差別がある。そして一口で區別して見ると、前者は散文的であるのに對して後者は抒情詩的である。

汽車の旅は殺風景であり周章ただしい。短距離の際には勿論、たとひ一日二日の旅でも、隣室の乗客とさへも口も利かないで別れて仕舞ふのが常である。氏も素情も判らないから、乗客同志も互に用心し合つて「人を見たら泥棒と思へ」といふやうな心持で對する。で、混んででもゐるやうな場合なら、一寸席を外してゐる間に自分の座席が狭くなつてゐるやうなことも決して珍らしくはない。それに乗降が頻繁であるから、尙更用心が肝要になり尙更殺風景になる。やつと顔馴染になつた人があると思ふ

と、一寸目を瞑つてゐる中に別な人間と變つてゐるやうなことも少くない。それに萬事が個人本位である。飲食でも談話でも他人に對する遠慮などは殆どない。夜行汽車などで、やつと眠りついたかと思ふとドヤ〜と乗り込み、大きな聲で話し合つて寢つかれないといふやうなことは決して少くない。不正乗客などの多いのも不快なことの一つである。その代り汽車は凡て便利である。本線の重要線でもあれば、乗りたい時に乗られるし降りたい時に降りられる。座ながらにして、電報も打てれば手紙も出せば土産物も買へる。飲食も亦その通りである。以上の意味で、汽車は都會的であるといふことが出来る。

汽船旅行は趣致に富んでゐる。臚げではあるが乗客一同死生を俱にするといふ覺悟がある。乗客同志の身元も分つてゐる。行先も大部分同じである。だから乗客は互に他を信じ互に他を頼みとしてゐる。食事も大抵平等である。乗降が頻繁でないと共に急速でないから氣持がゆつたりしてゐる。少くとも同じクラスの乗客同志であれば、

直ぐに親しくなつて何彼と語り合ふのが常である。船員と乗客との関係も親しみが深い。又海さへ荒れてゐなければ、ゆつくり眠ることも出来、読み書きも出来る。娯樂機關さへも具はつてゐる。併し、一方から見れば船は不便である。海が荒れば數日も出ないことがある。一日一回の所では乗り遅ればまる一日待つてゐなければならぬ。飲食や通信に於ても不便なことは到底汽車の比ではない。そればかりか難船といふ命がけの心配がある。以上の意味で、汽船は田舎的であるといふことが出来る。

□

汽車旅行で私に快感を與へるものの一つは、紫の板に白字で書いた驛名板である。一二等室のクシ・ンの色もよい。不快なことも多數あるが、前に擧げたことの他、洗面所に水のないこと、急行の遅れること、故障があつて遅れたり規定以外の時間停車したりする場合に何の通告もないこと、赤帽が頼んだ荷物を發車間際まで運び込まないこと、電氣の暗いこと、無電氣でトンネルをくぐること、などがその數例である。

□

七月の末、家族を連れて湯ヶ原に行く輕鐵中のことであつた。口をきゝあつた横濱とかの四十を越した婦人が、私の小さな子をあやした後で持ち合せの菓子と呉れた。私共は困つたことになつたとは思つたが、折角の好意を無にするのも心苦しいので頂戴するやうに子供に言葉をかけてやつた。子供は勿論喜んで貰ひ受けた。私たちも口を揃へて謝意を表した。が、直ぐに子供に向つて、「あとで汽車からおんりしてお手を洗つてからてうだいしませうね」といつた。すると子供は「うん！」といつてその菓子を母親に渡した。私ははじめて救はれたやうにホツと吐息をついた。

□

他人の子供に何か（殊に食べ物）與へる時には直接に與ふべきものではなくて必ず其の親を通して間接に與へるやうにすべきものである。——「お差支がなければお子さんに上げて下さう」といひ添へて。

宿屋問題が大分やかましくなつて來たがこれはよいことである。宿屋には改善すべきことが山程あるといひたい程今日の宿屋は缺陷だらけである。實に旅の幸福と否とを決定する主要素は宿屋であるといつても、恐らくは過言であるまい。必ず西洋流に一切合理的にする必要はないが、もう少し合理的にして欲しいものである。即ち、宿料とか室とかいふものも宿屋本位——實は番頭や女中本位ではなくて、客の要求を參酌して定めるやうにして欲しい。よく見そこねられても悪く見そこねられても、兎に角分不相應な又は要求と異つた待遇をされるのは客にとつて迷惑なことである。それから、食事の時間とか床の上げ下しの時間とかいふものも客の要求を參酌してすべきものである。私のやうに、朝は早くから夜も晩くまで讀書や仕事をするものが、他の遊覧客などと一緒に床の上げ下しをされるのはかなり困つたことである。それから、私共のやうに水道の水を愛用してゐるものにとつて、宿屋で水が不自由であるの

は非常な苦痛である。一々女中を煩はさなければお茶が呑めないことも苦しい。又紙屑籠が室に具つてゐないことも不便の一つである。隣室との區別が嚴重でないのも心配である。併し、何をいつても宿屋の缺點は畢竟客の缺點——客の作つた缺點である。宿屋を改善しようとするには何よりも客其のものが自覺しなくてはならない。私の僅かばかりの旅行の經驗によれば、高知市の城西館程氣持のよい宿屋は他に見たことがない。

旅から歸つて來てからしみじみと東京がよいと思つたのは水を思ふ存分に使はれることである。實に私は、心から「水道」に感謝しつつ水を使つてゐるのである。併し、この敬虔な心が何時まで續くかを思ふと寂寥と悲哀とを感ずる。本當に澄んだ心で見れば、殆ど一切の事象に對して感謝すべき程であるにも係らず、因襲や習慣のため一向平氣である自分の心が淺ましい。

久し振で私は初秋の半日を劇場で過した。評判の「坂崎出羽守」は勿論面白かつたが、「笠森おせん」が案外に私の涙を誘つた。家康に欺かれ千姫に振られて自刃する出羽守は勿論同情すべきではあるが、家康の孫と生れながら永しへに性的生活の安住境を見出すことが出来ないで、亂倫淫行殆ど色情狂に近い生活をして遂に醜い最後を遂げるに至つた千姫こそ、本當に不幸な婦人であると思はずにはゐられなかつた。「義理」の一語で心から愛する男に捨てられた上に、人手にかゝつてはかない死を遂げるおきつもかあいさうな婦人である。化けて来るのも無理ではない。兎に角近頃でない面白い芝居であつた。殊に私に快感を與へたのは俳優達の奮闘振である。菊五郎は勿論、宗之助の如きは殆ど火の出るやうな奮闘振である。逆境がよいのである。他流仕合がよいのである。

「千姫は歌右衛門のものですね」お仙は是非梅幸にやらして見たいものですねえ」「先代の音羽屋とはとても比べものになりませんよ」……私の同席の一老人はしきりにこんなことを私に話しかけた。私は言葉の表面の意味には同意し得たが、凡て舊いものを標準として新しいものを律して行かう——貶視しようとする老人の考へ方には賛成することが出来なかつた。

今年の初夏に新しい蚊帳を求めたが、一度も吊らない中に初秋が来てしまつた。旅行の始めから新しい襦袢とゴム草履とをトランクに入れて持ち廻つたが、一度も使用しない中に旅行が終つて仕舞つた。それでも一向不満を感じないのが面白い。淺薄な實用主義を打破することの出来る一つの論據をこの單純にして複雑な事象の裡に見出すことが出来るからである。

櫻花が大和心の象徴となつてゐるが、私はこれに賛成が出来ない。櫻花は華やかではあるがその美に深味と複雑さが缺けてゐるからである。「三日見ね間の櫻かな」の句が暗示する如く、餘りにうつろひ易き色香だからである。それよりも私は、朝顔に一層多くの興味を感じてゐる。先づ其の融通無礙な姿態がよい。殆ど無限に伸びて行く旺盛な生命力がよい。生命のあるかぎり毎日花が咲いて行く神秘なところがよい。花や蕾の色や形にそれ／＼顯著な個性が鮮かに現れてゐるのがよい。花や蕾の形がよい。勿論、花の壽命の短いことや他にからみつかうとするところは不快ではあるが。

私はどうしても力士が好きにはなれない。力士を考へるといつも悲哀を感じる。三十歳以前だけが彼等の生命であるといふことが悲哀でなくて何であらうか。この點から見ると俳優は幸福である。七十が八十になつても自分の天分を盡し、自分の地位を

保ち、自分の價值を高めることが出来る。俳優は文字通に舞臺で死ぬことが出来るが、力士は怪我以外には土俵で死ぬことが出来ない。

又秋祭が来た。私は大東京の眞只中で、改造の今日有爲の青年たちが樽御輿をかついで三日も四日もワッシ・イ／＼ボンポコ／＼とやつてるのを見ると情なくなる。信仰はよい。併しこの種の信仰は殆ど無價値な信仰である。私は東京市民少くとも青年諸君の自覺を要望して止まない。

帝展の第一日を観た。招待日であり殊に正午近い時であつたので割合に混んでゐるのが嬉しかった。鉛筆片手に見廻るこまちやくれた女學生などが一人もゐなかつたのが殊に嬉しかった。併し、作品のあんまり平凡なものには失望した。どれも／＼一通りは出来てゐるが一目して感興をそゝるやうな作品が繪畫と彫刻とを通じて一つもな

かつたのはいはうやうなき寂しさであつた。殊に彫刻の千遍一律な裸體像は、美感どころか寧ろ醜惡な感じを與へた。繪畫でも見て、羞恥を感ずるやうなものが少くなかつた。摸倣の餘りに多いのは最も大きな悲哀であつた。

□  
會場で一緒になつた『婦人公論』主幹のS君（私の早稻田に於ける同窓生）他二人の同誌編輯の人々と山下のレストランで軽い晝餐を認めた。S君たちは何とかいふ松茸の新料理を注文した。私はそれを食べようとしなかつた。似而非斬新が私の趣味に反することを恐れたからである。やがて出來上つた料理にフォークを付けるや否や、S君は直ぐに「これはいかん」といつた。私はさもあるべきことゝ心で微笑してゐた。

□  
思想學問は勿論、着物や持物さへも流行を趁うことは私の好まないところである。

流行は質的のものではなくて量的のものだからである。よいから流行るのではなく流行るからよいのだからである。事實着物の色合や縞柄などの流行は反復に過ぎない。最近の惡流行の一つとして私の嫌ひなものゝ一つは、女の分け髪である。年齢や顔立や服裝の如何も問はず、只髪だけ七分三分に分けてゐる女たちを見ると、私は寧ろ憐愍を感ずるものである。

□  
子供のために蓄音機を求めた。そしてレコードを新しく買ふ度に感ずることは、どんな名曲もはじめの一二度はそんなに面白くないが、回を重ねるに従つて益々面白くなつて來ることである。そして、これは勿論ひとり蓄音機のみに限つたことではない。思想に於ても人格に於ても、掘れば掘る程深くなるものでなければ本當に價值あるものではない。



或の秋の日、妻と二人で日本橋の「西川」に蒲團を買ひに行つた。暫らく物色した後で二つの種類を捜し出したが、中々決斷がつかずにゐると、他の客が私共の買はうとしてゐたもの、中安い方の値段を店員に尋ねてゐた。私共はほんの僅かの時間で相談して高い方を求めることにした。——私は後から考へて見て、偶然とか機会とかいふことが私共の行爲に對してどれだけ大きな力を持つてゐるかに驚かずにはゐられなかつた。何故なら、その場合他の客が來なかつたなら安い蒲團を求めたかも知れないから。

□

或る時數へ年三つの三男に汽車の繪を書いてやつた。そして彼の要求に従つて、彼が彼の所謂「日本の旗」を手に持つて客車に乗つてゐるところを書き添へてやつた。彼は暫らく喜んで其の圖を見てゐたが、間もなくチョコ／＼私の側に驅け寄つて來て、「チャン／＼！まア坊おんりする！まア坊おんりする！」とせがみ始めた。客車に

乗り飽きたから下りるといふ意味である。私は直ぐ様其の客車の側に「日本の旗」を持つた子供の圖を描いてやつたら、こんどは母親の方に向つて「ガンチャン！まア坊汽車ポッポおんりしたよ！」と元氣よく叫んだ。私は彼の想像力の鋭さと束縛に對する苦痛の強さとに驚かずにはゐられなかつた。

□

子供のために汽車の繪を描いてやらうとした時に、私は汽車について持つてゐる觀念の如何に曖昧であり不正確であるかを知つて、今更のやうに自分の不注意に驚かすにはゐられなかつた。吁、二十年の間數へ切れぬ程親しく見もし乗りもした汽車の輪廓すら描き得ないとは、何といふ情けないことであらう。それにしても、發表が正しき理會を得るために如何に必要なことであらう。

□

私の家の前を通る豆腐屋が數人ある。その中の一人は、いつも他の豆腐屋の通らな

い時刻に決してラッパを鳴らさず、一々戸を開けて注文を聞いて歩く。私はこの商賣振に對して少からず反感を持つてゐる。凡そ何事でも競争は公明正大でなくてはならないと信じてゐるからである。

最近私は舊著『若き教育者の自覺と告白』と、今夏試みた教育研究大會の講演筆記とを印刷に附する前に一通目を通した。前者は舊著であり、後者は講演筆記であつたために、自ら何れも不満足なものであつた。けれども、私は前者は勿論後者に於てさへ誤字や甚だしく意味の通らない所に朱を加へたゞけで印刷に附することにした。舊著は九年前の自分が正直に出てゐる所のみ舊著としての價値があり、講演筆記は講演の當時に於て自己が最善を盡したものの記録としてのみ講演筆記としての意義があると思つたからである。

伊藤燐子の離婚沙汰が又新聞紙を賑はした。いやなことである。眞の自覺から出た行動でないからである。華族の娘であるとか僅かばかりの文才があるとかいふことを鼻にかけて、人もなげな言動をする彼女の不聰明は只々憐愍に價するのみである。幸、新聞紙の論調が彼女の非難に傾いてゐるのがうれしい。華族とか金持とかに關することだと何ごとでも大騒ぎするやうではまだくゞ駄目である。

一代富隈安田善次郎翁が刺された。彼には非難すべきものが多かつた。併し、私は彼の徹底的な態度に對しては少くともかなり強い興味を感じるものである。毀譽褒貶を超越して何處まで自己の是とする所を執つて邁進する彼の男性的態度を面白いと思ふ。一方では惡事の限りを盡してゐながら他方では慈善をしたり公共事業に盡力したりして一世を韜晦した上に爵位などまで贏ち得てゐる人達よりも、本當の意味で善人になり得る素質を多分に具へてゐると思ふ。私は惡に強いものが善にも強いのだと

思ふ。この意味で、私は彼が悪——利己に徹底することに即して善に——利他に目覚める日の到来しない中に兇刃に刺されたことを氣の毒に思ふものである。

□  
或る日一人の見知らぬ男が尋ねて來た。「先生」「先生」と口ぐせのやうに言つたり、器物や何かを無性矢鱈に褒めたりした後で、「實は」と改まつて用向をいひ出した。その用向といふのは或る刊行物を買つて呉れといふことであつた。

□  
或る地方出の婦人を案内して神田の袴屋をたづねた。不幸にしてその婦人の氣に入つた袴が無かつたが、折角見たのを氣の毒に思つて氣に入らないものを求めようとした。私はこれを止めて店を出た。氣に入らないものを求めることは、自己に不忠實であるばかりでなくその店に對しても信實ではないと思つたからである。

□  
秋は酣である。昨日今日の我が心は清く靜かである。降るもよく照るもよい。

□  
原首相が暗殺された。野村隈畔君が情死した。人生は神秘である。運命は數奇である。

□  
原氏暗殺の新聞記事を見た時には私は譯もなく悲しくなつてハラ／＼と涙を流したが、野村君の情死の記事を見た時には不快感に襲はれるのをどうすることも出来なかつた。野村君たちの死體を引取に行つた野村君の一友人が、抱合の死體を見た時に少からず不快を感じたとのことであるが、眞偽はいざ知らず、さもあるべきことである。世の中で厭なことの一つは自殺者殊に情死者の後仕末である。

□  
野村君の告別式の夜は苦しい一夜であつた。「申譯のないことを致しまして……」と

いふ冷静な未亡人の挨拶が先づ私の胸を痛めた。一人娘の美代子さんが無邪気で元氣のよいのも悲しいことであつた。私は何といつて挨拶してよいかさへ判らなかつた。二三の人達も「挨拶に困るね」などとさゝやいてゐた。野村君の最後の手記を見ると、全く戀に陶醉して喜んで死に逝いたらしいといふことを聞くに至つて、私は未亡人や令嬢の姿を見るさへ心苦しかつた。野村君が心から喜んで死に逝いたことが眞實であるならば、野村君のために悲しむ必要がないし、未亡人や令嬢は野村君が背いて捨てた人々であり、そしてこの人々は私に一面識もない人々であるかぎり、私が哀悼の至情を捧げる意味は、普通の知己友人の家族に對するそれとは餘程趣を異にしたものでなくてはならない。——私は長座するに堪へられなくて、告別式が終ると走皇として辭し去つた。

□

私は必ずしも自殺を否定しはしない。時としては情死をさへも否定しはしない。隨

つて、私が野村君の死に對して不満を感じるのは、それが自殺であり情死であるがためではない。野村君の自殺乃至情死に深みがなく獨創がないからである。それはこれ迄見飽き聞き飽きた月並な情死に過ぎないからである。情死に意義を附する苦悶が、情死を美化する獨得の形式を缺いてゐるからである。戀を得て僅に二ヶ月、美装し抱合して水に投じ、死骸となつて焼かれる。そこに思想家として哲學者として現代人として分別盛の中年者として乃至セルフ・メイド・マンとしての野村君の特色を傳へるものは、美装してゐること以外には一つもない。私は、情死した野村君と哲學者思想家としての野村君との間に餘りに甚だしい距離のあるのが悲しい。果してその何れが本當の野村君であらうか。若し、この兩者共本當の野村君であれば、野村君は本當に不幸な人ではあるまいか。

□

陸軍特別大演習のために數日間東京市民は砲聲や爆音やで平安を害された。子供

達が、砲聲を聞いて喜び爆音を聞いて嬉しがる様子を見ながら、何のために態々帝都を演習地に選んだか、この演習が實際役に立つ時があつたらどうかといふことに想ひ到ると、私は戦慄を覺えずにはゐられなかつた。

□  
晩秋の一日、小さな子との長い間に亘る約束を果すために家族一同で動物園に行つた。私は忙しいために、園内で落ち合ふ約束で半時間許り後れて出かけた。所が動物園に行つた時には定時（午後三時までしか入場券を賣らないことを知らなかつた）を七分過ぎてゐた。私は門衛に事情を話して、「來たといふことを知らせるだけの間入れて呉れ」と懇願したがどうしても聞き入れては呉れなかつた。私は止むなく三十分許門前で待つてゐた。そして門衛の無情をうらむよりも、たつた七分遅れたばかりで態々來たことが無意義に歸して仕舞つたことを心から悔んでゐた。

嘗て私が或る一團の教育家の評論を試みたことがあるが、其の對象になつた一人が或る雜誌上に駁論を書いてゐる。その理由とする所が滑稽である。其の人が私と一度も遇つたことがないから、私が其の人の人物を知つてゐる筈がないし、その人が私の書いたものを一度も讀んだことがないから、私がその人の思想を知つてゐる筈がないし、それでゐて私が其の人の評論を試みたから私の態度が不誠實であり、私の評論が無價值であるといふのである。ところが、幸か不幸か私は其の人とは少くとも二三回遇つてゐるし（一度は其の人の學校の運動會を半日參觀した）、又其の人の近頃の著書も論文も讀んでゐるのである。自分が人を知らないから人が自分を知らないといふ論理が通るなら世の中はかなり簡單になるが、中々さうは行かない。而も其の人は私が哲學者であつて自分が科學者であるといつてゐる。こんな主觀的態度や偏見で出來上る科學とは果してどんなものであらうか。私は考へただけで戦慄を覺える。而もこんな考へを持つた人が都下一流の女學校長であるに於てをや。

「百聞は一見に如かず」といふ言葉はたしかに大きな眞實を含んでゐるが、この百聞の「聞」の字にも一見の「見」の字にもいろ／＼の意味があることを考へないと、切角の名俚諺をも誤用することがある。時によつては「百見は一聞に如かず」といつた方が一層妥當な場合もあり得るからである。

或る日次男に或る教訓を施してゐた時のこと、救世軍の人が一部五錢の『ときのこと』を賣りに來た。私は冷やかな聲で即座に「いらぬ」と取次の者にいはしたら、その人は大さう丁寧な言葉で辭し去つた。私はその日終日悲しい恥かしい氣分で過した。

雑誌の増大號が出る度毎に私はいつもいやな思ひをする。それはいろ／＼な口實で

雑誌を貰はうとする人がかなりに多いからである。金まうけのためにやつてゐる雑誌でないから、十部や二十部やることは經濟的にはさしたることでないが、私のために誌代を拂つて購讀してゐられる讀者諸君のこと、只讀まうとする人の動機とを考へ合して、私は只の一部も送らないことにしてゐる。

いつも剃刀を研いで貰ふ研屋がこの十日許り一向家の前を通らない。恐らく収入の少い商賣であらうが、商賣に出ないなら尙更困りはしないか。この寒空に彼は病んででもゐはしないか。それとも商賣換か又は轉地でもしたのか。私は今、「はさーみかみそりとぎイ」といふ多年聞き慣れた彼の振聲を想ひ浮べて暗い心になつてゐる。

或る夕方、電車で上野からの歸途、傳通院と大曲との間で砲兵工廠歸りの職工達の長い行列に出遭つた。その中のかかりに多い女工たちが髪から身なりから皆キチンと

たしなみのある装ひをしてゐたのを見て、私は心に喜びを感じずにはゐられなかつた。

□  
呼思出の多い大正十年は逝きつゝある。永久に母を喪ひ、そして子供をはじめて小学校に入れた悲しくして楽しい大正十年を、恐らく私は永しへに忘れることが出来な

□  
新年はいろ／＼な意味で欣ばしい。その中で最も平凡ではあるが最も眞實な欣びは、ふだん粗末にしてゐる小さな家族の幸福を心から祈ることが出来ること、規則に囚はれない伸々とした生活を送ることが出来ることである。ふだんは一見して貴賤貧富や階級職業の區別がわかるのに、新年には業を休んだり盛装をしたりするためこれらの區別がさ程はつきりせず、随つて萬人が皆「人間」として、幸福な人間とし

て交際することが出来るのも、嬉しいことの一つである。

□  
正月はふだん働いてゐる者を休ませ、ふだん苦しんでゐるものを樂しませべき時である。餅を澤山ついて置いたり、おかずをどつさりこしらへて置いたりするのも、皆妻君や女中の手を省くためである。この意味で、私は正月早々他人のうちを訪問して落ちついて酒など飲んでゐるのはきらいである。

□  
正月の飾の中で私は松と蝦とお飾りが好きである。竹は幹を切りそいだのはよいが葉のついたのはきらいである。松は大きいものより小さいのがよい。正月の花では水仙は好きだが南天や福壽草は餘り好きでない。

□  
神田の或る賑やかな町に近頃新しく出来た本屋では、店頭に木製の書籍を積み重ね

たものを飾つて目印としてゐる。私ははじめてそれを見た時に模型とは判らなかつたので、こんなことをして置いて人に取られはしないかと思つてひそかに心配したが、それが模型だとわかると、其の巧妙に驚くと共に、心のよくないものゝ盗心を挑發するかも知れないといふことに想ひ到つて、幾分の憤りを覺えた。

□

電車の中の廣告で特に目立つのは「貸衣裳」の廣告である。文に曰く、「上流と花柳界とで盛に利用されます」と。何といふ皮肉な文字であり歎くべき事實であらう。併し、借衣をして一時を繕ひ世間を瞞着するのは果してひとり貴族と賣笑婦とのみであらうか。彼等の借物は衣裳であるだけつと罪が浅いではないか。學者とか思想家とかいふ精神生活の獨立を第一義とすべきものが學識や思想の借着をしてゐるといふところ、最も憎むべきことではないか。

□

毎年年末になると周章だしく結婚するものが多い。年を一つ餘計にとるのをおそれて五日や十日で結婚を纏めるやうな囚はれた思想や習慣が打破されない中は結婚の改造は到底覺束ない。殊に、女が三十歳前後までも選り好みをしてゐながら、急につまらぬ者と結婚するといふやうなことは愚の骨頂である。事實そんな結婚は決して幸福を生み出すものではない。

□

教育の社會化はよい。女子教育の社會化もよい。けれどもそれは目的でなくて方便であると共に、やりやうが悪いと案外の惡結果を生ずることを忘れてはならない。最近、東京府立の某女學校では、生徒に市疑獄事件の公判を參觀させたさうだが、これは私の容易に賛成し得ないことである。女學生に裁判の様子を知らせることはよいけれども、それがため彼等本然の美しい情操を傷つけることは取り返しのつかない損失である。たとひ一度誤つて縲紲の辱を受けたとはいへ、この度の市疑獄事件の被告と



なつたものは、大抵其の素質能力に於ても地位に於ても中流以上の人達であると共に大抵は一方ならぬ羞恥と悔恨とを感じてゐる人達である。それを女學生が物見遊山でもするやうな心持で見えてゐるといふことは、教育上決してよいことではない。女學生をして、裁判所の模様などは知らさなくてもよい（私は未だ一度も裁判所の門をくゞつたことがない）から、心から罪惡を厭惡すると共に、心から罪人を憐れむやうな情操の所有者たらしめる如き教育をして欲しいものである。

市疑獄事件の被告の多くが、法廷に立つて互に他の相被告の非難攻撃と自己辯護とをやつてゐるのは醜の醜である。併し、利によつて結ばれたものは利によつて容易く離れるのを見ることは悲しい痛快事である。

商人は「利」を生命とするものであるから、金まうけの工夫を講ずるのは差支ない

が、其の手段に餘りに惡辣醜劣なものがあるのは悲しむべきことである。殊にそれが歳末に於て最も多く現はれる。その中で最も憎むべきものゝ一つは、店仕舞など、廣告して客を吊つて置きながら一向店を仕舞はずにゐることである。他人の同情と欲心とを利用してまうけようとするからである。

「奉仕」といふ言葉は近頃盛んに用ひられる流行語の一つであるが、これが、たとへば「特價奉仕」とか「奉仕デー」とか「奉仕編」とかいふやうな具合に、商人の商略に悪用されてゐるのは不快なことである。

晩秋の或る日の午後、私は區會議員選舉の投票のために區役所に行つた。私の投票を心當てにしてゐる候補者が三人あつた。一人は前日の夕方直接に私を訪問したし、一人は其の日の早朝から二度運動員を寄越したし、も一人も同様前の人より一足おくれ

に二度運動員を寄越した。そして私は、三人の中二人は是非當選させたいし且させねばならぬ責任を感じずる人達である。けれども私の投票は勿論一票しかない。さう思つた時に、私ははじめて「棄權」といふことの意義を本當に理會することが出来た。若し兩者又はそれ以上の多數に對して平等に自分の好意を表現しようとするならば棄權を措いて選ぶべき道はないからである。けれども私は棄權の途を取らなかつた。私が當選を希望する二人の候補者の間には、好意を表する上に幾分の差等があると共に、棄權といふことは消極的ないはゞ卑怯な狡猾な方途だからである。かうして私は投票の對象を決定して選舉所に足を運んだ。そして某君休憩所と記した多くの白旗の中から右兩知人の名を見出しながら、私はどちらにも立寄らずに急いで會場に入り、投票を終つてから始めて投票した知人の休憩所を訪ねてその旨を本人に告げ急いで歸途にいた。たとひ僅かな時間でも、自分の良心の自由な發動を束縛されることをおそれたと共に、未だ實現しない厚意を豫告して恩を售ることを心苦しく思つたからである。

やがて區會議員の選舉が終ると、當選者の謝狀が數通來た。勿論其の大部分は感謝される理由のないものである。私は謝狀を受取る度に、始めて買物をした店から「毎度ありがとうございます」といはれた時と同じやうな不快を感じた。その中で一番心苦しく思つたのは、心から當選を希ひながら投票の出來なかつた一知人の謝狀であつた。幸にしてその人は、私が投票した知人以上の票數で當選したこと、私が選舉の夜その人の當否を確めるために態々或る所まで出掛けたこととを思ひ合せて、幾分の安易を感じた。

□

東京は大地震のために水責めに遭つた。人並以上水を愛用する私は少からぬ不便を感じた。そしてフト水道課員を非難するやうな氣持になつたが、それが誤りであることを悟ると、かなり強い羞恥を感じた。悪いのは天災其のものと不完全な設備をしたものであつて、現在の水道課員の大多數は、死に者狂ひで應急策を施してゐる點

で感謝にこそ償すれ、決して非難すべきものではないからである。

□  
地方出の婦人を望んでゐた或る知人が東京育ちの婦人と結婚した。私はこの話を當人から聞かされて、祝詞を述べた後で、「地方出の人よりは東京で育つた人はやつぱりあなたのやうな御商賣には向きますからね」といつたが、直ぐにそれが餘りに無自覺な不謹慎な言葉づかひであることを悟つたので残念でたまらなかつた。

□  
或る時、鼠とりにかゝつた鼠が死んだ。そこに猫が來たので、家人は鼠を猫に與へたが食はずに去つた。又或る時、猫の前に漸く歩くだけの力しか無くなつた鼠を籠から出したが鼠が、動かない中は手も觸れないで、動き出すの待つて飛び付いた。これらの光景を見た時、私は共に強いショックを感じた。彼の心に、只高潔な人格者にのみ見ることが出来るやうな高いほこりが具つてゐること、猫にも劣るやうな醜劣な要

素が自分の生命の中に宿つてゐることを知つたからである。

□  
明けましてお目出たう！

この言葉は、數多い月並な言葉の中でも最も月並な言葉である。併し、私は、この月並な言葉も、使用者の心持によつては非常に新鮮なものとなつて來ると思ふものである。私から見れば、年頭に際し、透徹した自覺で、萬人に「明けましてお目出たう！」といひ得ると共に、さういはずにゐられないばかりか、更に、毎朝乃至仕事や努力をはじめめる時に、否四六時中何時も、年頭に「明けましてお目出たう！」といふ時のやうな活き／＼した心持でゐられる人が、眞に幸福な人である。随つて問題は、眞に自覺してこの言葉を用ゐるかどうかといふ點にある。

然らば、眞に自覺してこの言葉を用ゐるとは果してどんな意味であらうか。いふまでもなく、それは反省と要求、満足と不満、歡喜と發奮とが相即すると共に、自己に

對する態度と他人に對する態度とが一致した心境に於てこの言葉を用ゐることである。言ひ換へれば、過去一個年の自己の生活に對して、嚴肅な反省と批判とを試みると共に、來るべき年に對して高大な希望要求をかゝげ、過去一個年の生活に對して満足歡喜を感ずると共に、それを以て足れりとせずしてよりよき生活を營まんがために發奮し、更に、自己一個の幸福を喜び自己一個の價値の増進を希ふばかりでなく、骨肉知己否全人類の幸福を喜びその價値の増進を希ふ心の表現としてこの言葉を用ゐることである。少くとも私は、この心持で改めて讀者諸君に「新年お目出たう！」を申し上げるのである。

けれども、過去一年に於ける私の生活を嚴正に反省する時には、私は必ずしも衷心の満足と安心とを感ずることが出來ない。何故ならば、過去一個年に於ける私の生活は、私の生活方針の一たる「修養即事業」の本旨に乖戻して、餘りに事業の方に傾いたからである。希くば、今年修養に一層多くの力を用ひ、出來るならば私の畢生の

事業に一指を染めることによつて昨年償ひとしたいものである。私は今かなりに強い悔恨に苦しんでゐる。けれども、自己將來の希望と人類の幸福及び價値の増進に對する欲求とに伴ふかすけき歡喜の心をたよりとして、今一度「明けましてお目出たう！」といはうと思ふ。

□

大隈さんが亡くなつた。或る意味に於てはたしかに偉人であつた侯の死に對して、私は衷心哀悼の意を表するが、正直のところ私は侯の死について感覺的の悲哀を感ずることが少い。これは勿論侯の生涯が餘りに華やかであつたのと、侯の死が瞑目の數日前から豫定の事實として世間に喧傳されてゐたためであるが、侯は或る意味に於て功成り名遂げた人であつて、侯の前途に期待することが尠かつたといふことも、一つの原因でなくてはならない。

世には大隈さんの死が侯の百二十五歳説を裏切つたことを遺憾とするものも少くな